

---

IS インフィニット・ストラトス シン・アスカの激闘

ちくわヘルシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス シン・アスカの激闘

### 【Nコード】

N1524V

### 【作者名】

ちくわヘルシー

### 【あらすじ】

メサイア防衛戦にて、激闘の末アスランに敗北したシン。幻想の中ステラと『明日を見て生きること』を約束したシンが目覚ませば、そこは見知らぬ倉庫のような場所。奥に進むとそこには、鎧のような『何か』があった……

色々あってシンが入学したのは『女子しかいない（他一名除く）』とんでもない学校だった！果たしてシン・アスカの明日はどこに向かう！？

戦闘あり！ ラブコメあり！ 『IS インフィニット・ストラト

ス』と『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』の夢のク  
ロスオーバー、ここにあり！

……ってな感じのモノが書けたら良いなあ。

## プロローグ『加速する明日』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・この作品は『シン・アスカ』を主役に据えています。彼が嫌いな方は回れ右してください。
- ・『シン・アスカ』は原作……もとい高山版を『ベース』にしています。全て設定が高山版通りではないので、ご了承ください。
- ・原作双方の雰囲気壊れているかもしれません。
- ・は俺の嫁！という方、ご注意ください。あなたの嫁はシン・アスカに取られるかもしれません。

最後に、このような形で失礼ですが、既に同発想でSSを書いていただける作者様方に心よりの敬意とお礼を申し上げます。

## プロローグ『加速する明日』

ねえ、ステラ。君は今の俺を見たらどう思うかな？ 怒るかな？  
それとも笑うかな？

あ、いきなりこんなことを聞いてゴメン。つい……

大丈夫。約束は、忘れてないから。君の言ったとおり、俺は前を見て、明日を生きている。それが君との約束だから。

うっん、君だけじゃない……父さん、母さん、マユにレイの分まで……みんなの分まで明日を生きるって俺は決めたから。

過去に囚われるなって、アスランは言った。確かに俺は、過去に縛られていたかもしれない。けど、失った過去を守ることが間違いだなんて、俺には思えない。だって、君やレイ達と過ごした時間は……俺にとって大切なものだったから。それを切り捨てることなんて、できない。

アスランも、きっと分かってくれると思う。あの人だって、大切なものを守りたかったわけだし。それに……なによりあの時、俺を止めてくれた。過去に囚われるだけで、憎しみで戦うことは間違いだって、俺に教えてくれた。

俺は過去を放ってはおかない。ちゃんと失った過去を背負って、それから、前を……明日に目を向けるんだ。今度こそ、大切なものを守るために。誰かにすがって、答えをもらうなんてことはしない。だから、安心して、ステラ。振り返りながらかもしれない。時々、足を止めることもあるかもしれない。けど、俺は歩き出すことを決めたんだ。

大丈夫さ。だって

生きている限り、明日はやって来るから。

……うん、ステラ、ゴメン。たった今、大丈夫だって、言ったばかりなのに……

俺は、真っ直ぐ前を見つめることができてない。うつむいたままだ。

足も全く動かせていない。立ち尽くしている。歩き出せていない。

目の前には、学校の校門がある。俺はそこをくぐることができないでいる。

どうしてかって？ 周りを見てくれれば、分かるはずだ。

俺は顔を上げて、周囲を見渡す。そこには

校門の前にたたずむ俺を、好奇の目で見ながら抜き去っていく、制服姿の女子、女子、女子女子女子女子……男子は一人もいない。女子だけだ。

ある女の子は、何も言わずにこっちを見つめ……別の女の子は、友達らしい子と手を取り合って、キツキツとはしゃぎながら……さらにまた他の子は、携帯のカメラをこっちに向けている……やめてくれ、フラッシュをたかないでくれ。

ああ、きつと動物園のパンダはこんな気分だったんだろうな。マユ、今度動物園に行く時は、ちゃんとパンダに挨拶しような。「今から写真撮りたいんだけど、良いですか？」って。何も言わずにシッターを切るのは失礼だ。よく分かった。

……ゴメン、話がそれた。ええっと……とにかく、数えてもキリがないぐらいの女の子が俺の周りにいる。敵機としてアーサーに報告したら、多分卒倒するぐらいに。それがいつせいに、こっちを見

ているんだ。その視線に圧倒されて、情けない話だけど、俺は動けないでいる。

逃げられたら良いんだけど、そういう訳にもいかないんだ。なにせ、今の俺が着ている服も、周りと同じような白地に赤いラインの入った制服。つまりは、そういうことだった。

今日この学校は入学式で、今日から俺はこの高校に通うことになっていて、ついでにこの学校には男子があと「一人」しかいないって……

どうしてこんなことになったんだろう？ うん、力が欲しいとは思った。守る力が欲しいとは思った。たまたま、それを手に入れることができた。

でも、知らなかったんだ。この世界では……その力は「女性にしか動かせない」代物だったなんて。なんで俺がそれを動かせるかも、分からなくて。

あゝ、もう、いい加減頭が混乱してきた。本当にそもそも、俺はどうしてここに来たんだよ……？

頭を抱えながら、もう何度目かは分からないけど、俺は記憶を掘り起こし始めた。

目の前には紅いモバイルスーツと黒い宇宙が広がっていた。

そのモバイルスーツ……ジャスティスがだんだんと遠くのほうに離れていく。右腕のなくなつたその機体が、俺をじつと見下ろしていた。

実際にはジャスティスが退いているわけじゃない。俺の方が落ちているところだった。

## メサイア防衛戦。

デュランダル議長が唱える、戦争のない平和な世界を創るための計画『デステイニープラン』を成功させるために、俺は最後の任務についていた。

任務の内容は、戦略兵器『レクイエム』と起動要塞『メサイア』の防衛、それを落とそうとするオーブ軍の遊撃。作戦が成功してオーブを討てば、全てが終る。

議長言うことが、本当に正しいのかは分からない。強制された平和で人が本当に幸せになれるのかって、アスランの言うことも分かるけど、だからって俺も戦わないわけにはいかないんだ。これで戦争がなくなるんだったら、仲間を守れるなら、たとえオーブを討つことになっても俺は戦う。

だから俺は、アスランと戦っていた。あんたが正しいっていうのなら、俺に勝ってみせろって、そう言っ

アスランの言う『人の向かうべき明日』。

俺が欲しかった『戦争のない明日』。

俺の明日がどんなものになるのか、分かるはずもなかった。

右腕と右足を切られたデステイニーが、ゆっくりと後ろに傾いていく。

機体の制御が利かない。

カメラは生きているけど、もう意味なんてなかった。

さっき左腕も持ってかれた。武装も、スラスタもやられている。

コクピットの中で鳴り止まないエマーゼンシーが、完全に俺の敗北を告げていた。

ああ……俺は負けたんだ。

でも不思議だ。悔しくてたまらないけど、嫌じゃない。素直に負けを認められる。

「アスラン……あんたやっぱ強いや……」

暗い宇宙の中で、周りは色々な光であふれていた。

ビームの閃光が走る。ミサイルの爆発が鎖を形作る。それに、モビルスーツが一際大きな輝きを見せては消えていく。

みんなまだ、戦っている。必死に、守りたいもののために。戦争のない、平和な世界のために。

さっきまで俺も、その中の一つだったはずなのに。

デステイニーはもう戦えない。俺の力が足りなかったからだ。

「シン……」

少しの間だけ俺のほうを見ていたジャステイスが、背を向けて宇宙に消えていった。

アスランの行く先はきつとレクイエムだ。そのままレクイエムは墜ちるだろう。

それを止めるのが、俺の任務だったのに。

駆けていくその光の筋を、俺は見ていることしか出来なかった。

すみません、議長。

ごめん、レイ。みんな。

俺、止められなかったよ。

俺はまた、守れなかったんだ。

月面の荒れ果てた大地がだんだん近づいていく。

落ちていくデステイニーの中で、俺の意識は遠くなっていた。

結局俺は、誰も守ってやれなかった……

周囲には何もなかった。

自分以外に何も見えない暗い空間の中で、まるで意識だけが浮いているみたいだ。体にも力が入らないし、それに、ひどく寒い。いつたいここはどこなんだろう？ レクイエムとメサイアは？ 議長は？ レイは？ ミネルバのみんなはどうなったんだ？

……もう、俺が気にしてても意味は無いかもしれない。

どうせまた、守れなかったんだから。

俺はどうなっても構わない。戦争のない、平和な世界のために、って戦ってきて……それでも、何も変えられなかったんだ。全てが、オーブにいたあの時のまま。

軍に入ってから、俺は強くなったと思った。全て叩き潰して、戦争なんて無くしてしまえるって思った。大切な全てを、今度こそ守ってみせると思った。

なのに、父さんと母さんとマユが死んだときと同じだった。ステラも守れなかった。目の前で死んでいった。

奪っていった奴らが憎かった。議長がくれたデステイニーさえあれば、そいつらを倒せると、平和な世界の邪魔をする奴を、全てなぎ払えると思った。

でも、最後はアスランに負けた。あの人は、憎しみで戦うなって言った。それじゃあ心は永久に救われはしないって。

……だったら、俺が今まで戦ってきたのは何だったんだ……？

これでやっと終わると思ったのに。もう戦わなくていいんだって……  
それなのに……

誰も守れなくて。何も守れなくて。ずっと守れなくて。

できるようになったのは、誰かを撃つことだけだったのか？ 誰  
かから奪うことだけだったのか？ だったら俺のしてきたことは……

無駄だった。何もかも……

暗闇の中でどうにかなってしまっただった。泣き叫びたいぐら  
いなのに、もう涙も出ないし、指一本すら動かせない。そのまま意  
識の底まで沈んでいきそうな、その時だった。

「そんなことないよ……！」

「え？ 誰？」

後ろから柔らかい光と一緒に、誰かの声が聞こえた。

暖かい、優しい光と声だ。その少し幼さの残る声に、はっとして  
振り向く。

振り向いたそこにはステラがいた。

「ステラ……シンに会えて良かった……」

ステラは笑っていた。出会った時と同じ金色の髪がはねている。  
でも、最後に会った時とは違って、嬉しそうに、本当に嬉しそうに  
笑っていた。

俺が守りたかった、守りきれなかったはずステラ笑顔……光は  
優しく俺を包んでいるけど、なんだか眩しくて、はっきりと目を開  
けていられなかった。

「だからシンも前を見て。明日を……」

その声を最後にして、ステラの姿は遠くに消えていった。さつきまでの刺すような寒さは無くなっていて、辺りは光でいっぱいになっている。

ステラ…… そうだな。俺はまだ、生きている。

枯れていたはずの涙で、目がにじむのが分かった。それを腕でぬぐって、なんとかこらえる。いつもみたいに、泣きわめくことはしなくなかった。

「ステラ…… 約束するよ。俺、今度こそ、守ってみせる」

姿は見えないけれど、きっと聞こえている。ステラは俺のそばにいてくれているはずだから。はっきりと決意の言葉を口にすると、俺の意識まで、光の中に溶けていった。

満ちていく光の中で、ぼんやりとしか覚えていないけど、何かを見た気がする。

差し伸べられた誰かの手。

それは、こっちにおいでというように俺に向かって……

どうしてだかは分からないけど、俺はその手をつかんだ。

覚えているのはそこまでだった。

目が覚めたときには、うす暗い部屋に放り出されていた。まず非常電源を起動させようとか、無線が生きているか確認しようとか手を

伸ばしたけれど、その手に触れるものがなくて、自分がコクピットの中にいるんじゃないってことに気付く。

「ここは……どこだ？」

なら、どこかの医務室か？ という疑問も、自分が固い床に転がされていることで、違つと分かる。医務室がいつぱいになつていても、流石に床に放り出したりはしないだろうし。幸いにも、俺はどこも怪我なんてしていなかったけど。それに、戦闘中らしい慌ただしさも振動もない。静かなものだった。

まだ少しふらつく頭を抱えて起き上がる。床を踏みしめられるのだから、重力があるみた……ちよつと待て、重力？ 回収された後に地球にでも連れて行かれたのか？

ヘルメットは……ない。どこかに置いていかれたらしい。パイロットスーツは着たままだ。ますます、よく分からない。拘束もされてないから、敵艦の中つてわけでもなさそうだし……

辺りを見渡すと、うずたかく積まれたダンボールの山だとか、見慣れない機材が積み重ねられている。何かの倉庫？ だったら俺は怪我が無いからって倉庫に投げ出されたのか、なんて考えると、ちよつと腹が立つ。

何でも良いから、ここを出なきゃ始まらない。そう思つてみたものの、結構な広さもあるらしいし、隙間なく物が詰め込まれた棚とかのせいで視界が狭い。すぐに出口は見つからないだろうけど、とりあえず辺りをふらふら歩き始める。

「誰か、いないのかー!？」

声をあげてみても、返事は聞こえなかった。自分の出した声が、倉庫の高い天井から跳ね返ってくるけれど、すぐにまた静寂に戻る。

状況もさっぱり理解できないせいで、苛立ちは募るばかり。

「どうなってるんだよ、いったい!？」

思わず声を荒げたその時、奥のほうから、ブンと機械が動き出したような音が聞こえた。今まで気付かなかったけど、その音の方角から光が漏れていた。それを追ってはみるものの、なんだか奥のほうに入り込んでしまっているみたいだ。そうは言っても音が気になつたから、かまわずに進む。何も無いよりマシだ。

荷物の迷路を、目的地の光だけを頼りに進んでいく。機材の山の壁と暗がりのせいで、時々つまずきそうになりながらも歩いていくと、パソコンの画面らしい明かりが目に入った。そろそろゴールらしい。最後の角を曲がったところの、一番奥に、それはあった。

「なんだ、これ……?」

打ちひしがれるような格好でたたずむ、灰色の、人型の何か。

胴体を覆うアーマー、腰のサイドスカート、そして無造作に投げ出されたその腕と足は、まるでモビルスーツを小さくしたみたいで……でも、所々には装甲がないし、何より頭部がない。こんな歯抜けた形じゃあ、自立して動くななんてできないだろうし……カメラまでないなら、作業用のロボットでもないのか？ それともただの作りかけか？

肩と背中、それから腰に繋がれた仰々しいケーブルは、隣のパソコンに伸びていて……画面の中はすさまじい速さで文字が躍っていた。

覗きこんでみると、わけの分からない用語のオンパレード。P I C整備完了、ハイパーセンサー整備完了、コア・ネットワーク動作確認終了、シールド・エネルギー充填完了……動作確認終了とか出ているんだから、整備はほぼ完璧なんだろう、きつと。

ただ、この灰色の鎧みたいなやつが動き出すなんて思えないし……鎧か。サイズも人間大だし、新しい作業用スーツなのかも。いや、それにしても、ずいぶん物々しいような……

触つたらまずいよな、とは思ったけれど、物珍しさもあってそれに手を伸ばしてみる。あと数センチでそれに触れそうになった時

ドンっという爆音が俺の体を揺らした。

『火災発生、火災発生！研究所第一棟の開発室から出火！』

続いて、緊急事態を知らせる警報が鳴り響く。サイレンの音に反応して、伸びた腕は勝手に引っ込んでいた。

「火事！？ 嘘だろ！？ こんな時に！！」

すぐに来た道を引き返して、出口を探し始める。もしここに弾薬があつて引火でもしたら、間違いなく俺は吹き飛ばされる。そんなのはゴメンだ。変な機械に構ってなんていられなかった。

戻りの道すがら、何度も爆発音が聞こえ、地面が揺れ動く。音のする距離はそんなに離れていない。煙がまだこつち来ていないのだけは救いだ。急がないと……

意外にも、引き返してみれば出口は近かったし、その前にはヘルメットが落ちていた。これで煙を吸い込む心配はしなくて済む……少しだけ安心してヘルメットを持ち上げると、中からカラン、と何かが入っている音がする。

手を入れてつかんでみれば、硬い、長方形の感触。取り出してみたそれは、ピンク色の携帯で マユの形見の携帯だった。

「何でこれが……って、今はそんなこと考えてちゃダメだ！」

艦に置いてきたはずだったけど……とにかく、これが見つかったなら、なおさら死ぬわけには行かない。携帯を握りしめて、片手で

ドアノブを回して扉を開く。

扉の先の廊下には、すっかり黒煙が立ちこめていた。スーツ越しにも伝わる熱気が、火が近づいていることを俺に教える。扉を閉めて、右に向かつて駆け出した。建物の構造を知らないせいで、どこから逃げればいいのか判断できないけれど、まず出火元から離れることが先決だ。

回りこんだ廊下の先の窓を開け、外がどうなっているかを確認する。下には庭が広がっていて、避難したらしい人たちがごった返している。庭を中心にして、左右と向かいに、それぞれ似たような建物がそびえ立っていた。

「おい君！ その下の庇から降りられるか!？」

窓から身を乗り出していると、こっちに気付いた庭の白衣の人が声をかけてくれた。下の庇？ よくよく真下を見ると、確かに庇があった。なるほど、これならなんとかかなりそうだ。

「今はしごも用意したから、急いで!!」

「はい、大丈夫です!!」

落とさないようにスーツの中に携帯をねじ込み、飛び降りようと窓枠に手をかけると、また大声が聞こえてきた。でも今度はもつと切羽詰ったような、悲痛さも感じられる声だった。

「放せ！ まだ娘が中にいるんだ!! 放せつてんだよ!!」

「主任!! 無茶ですつてば!! 消防の人を待たないと!!」

後ろの人に羽交い絞めにされても、必死に建物の中に飛び込もうとする人がいた。まだ中に人がいるのか？ なら助けないと!!

考えるよりも先に声を張り上げていた。

「その子、どこにいるんですか!？」

俺の声に気付いたその人が、はっと顔を上げる。顔はまだ若々しいけど、無精ひげと、着崩した白衣がだらしない。けどその顔は、そんなこと関係なく必死で、俺にすぎるような目を向けていた。

「何言ってるの! 君も早く!」多分四階だ! 今お前さんがいるところの一つ上だ! 頼む!」

後ろにいた人は止めようとしたけど、それはもう一つの嘆願にかき消される。返事をする時間も惜しい。窓に背を向けて、俺は階段を探して煙の中に入り込んでいった。

直後に、大きな衝撃。まだ爆発は止まらないらしい。急がないと火事で燃えるより先に、建物が崩れる。見つけた階段を数段ほど飛ばしながら駆け上がった、廊下に出た。廊下はもう火に包まれていて、3階よりも熱気は一段と増している。

「誰がいるか!? いたら返事してくれ!」

返事の代わりに聞こえてきたのは、女の子の泣き声。声のする部屋へ、炎を避けてひたすら走りこむ。扉を開けると、部屋の奥で女の子が震えていた。机の下に潜りこんで泣きじゃくっているその年のころは10ぐらいだろうか、長く伸ばした栗色の髪を先でまとめている。マユを思い出させるその見た目……大きく一度、心臓が跳ねた。

振り払うように頭を振って部屋に入り、机にしゃがみ込んで手を伸ばす。

「もう大丈夫!! こっち!!」

恐怖からなのか、女の子は何も言えなかったけど必死に俺の体にしがみついていた。

煙を吸わせないように注意しながらも、その子を抱えて部屋を後にする。見つけたのは良いけど、早く逃げないと……

廊下の炎はさらに高くうねり、爆発は建物を揺らし続ける。この階からじゃあ避難はもう無理だ。危うく炎に飲み込まれていた階段を飛び降りながら、再び三階の廊下に入る。

「っ!?! しまった、ふさがれた!?!」

通路の角を曲がってみれば、どこを通ってきたのか、火は道をもう完全にふさいでいた。背後からも炎が迫っているのに、前も後ろも遮られた形だ。

「こっちだ!!」

唯一残っていたのは倉庫ぐらいたった。少しでも時間稼ぎになるように入って扉を閉めたけど、焼け出されるのも時間の問題だ。

「くそっ!! 何とかならないのかよ!!」

扉に拳を打ち付けても答えが出るわけも無くて、虚しく音が響くだけだった。

「……っ!」

女の子のしがみつく力がいつそう強くなった。涙でぐしゃぐしゃ

になった顔をこっちに向けて、煙でカラカラに渴いたのだから、なんとか声を絞り出している。

「お兄ちゃん……大丈夫？ 助かる？」

「大丈夫。俺がちゃんと、君を守るから。お父さんの所に連れて行くから」

「……ほんとに？」

「うん。だから、大丈夫。安心して」

そう言うと女の子はちょっとだけ安心したのか、うなずくともう一度だけ手に力を込めた。

俺はその顔を真っ直ぐ見ることもできなかつた。

今の自分に何ができる？

怯えさせて、その後は気休めの言葉をかけるだけか？

ちくしょう……！

ちくしょう！

ちくしょう……！

約束したばかりなんだ……！

明日を生きるって、ステラと約束したばかりなんだ……！  
なのに……！

自分も守れないのかよ……！

この子一人も守れないのかよ……！

もう俺には、そんな力も無いのかよ……！

掌を強く握り締めて、歯を食いしばる。

『力』が、欲しい。

約束を守る『力』。

奪う力じゃない。

守る『力』。大切なものを……今度こそ。

今度こそ俺は守らなくちゃならないんだ。

薄暗いはずの倉庫が、急に真っ白になっていく。

倉庫のもの一切が、いや、壁も見えない。

抱きかかえていたはずの女の子も見えなくなって、何も聞こえなくなつた。

まるで時間の流れから切り離されたみたいに、周囲が静かになる。

白い空間の奥に見えたのは、ケーブルに繋がれていたあの鎧もどき。

動くわけでもない。何か言うわけでもない。

ただ、そこにあるだけだ。

それでも、はっきりと分かった。

俺のことを呼んでいる。

気付いた瞬間、まるでテレビの画面を切り替えたように、世界が元通りになつた。

弾かれたように体は動き出していた。

道なんて覚えていないのに、足は勝手に奥へと突き進む。

同じ角を曲がり、たどり着いた場所に座っているそれは、周りのことなんて全く気にかげずに、俺の前にあつた。

「これ……『IS』だ」

女の子がぼそりと呟く。『IS』、という名前に聞いた覚えはない。

これが何かなんて知らない。  
でも、たった一つだけ理解できることがある。

これは、『力』だ。守るための『力』だ。

抱えていた女の子を一度おろして、安心させるように髪を軽くな  
でた。

「大丈夫だから、安心して」

こつちを見上げながら、なでられた頭をおさえている女の子に背  
を向ける。

俺はその灰色に手をかざした。

お前が、俺のことを呼んだんだよな？ なら頼む。

俺に『力』をくれ。

『力』が必要なんだ。

だって俺はまだ

「俺はまだ、何も守れてないんだ!!」

手を触れた途端に、金属がこすれたような音が聞こえた。

次の瞬間には、頭の中には膨大な情報が滝のようになだれ込む。

普通だったらそのまま流されていくような情報も、自分の頭はO  
Sにでもなつたみたいに瞬時に処理していった。

力の何もかもが、分かる。力の使い方、特徴、装甲の限界、最大  
出力、意識に浮かび上がるパラメーターも、その見方も、何もかも。

機体を縛り付けていたケーブルが、排出される水蒸気と共に一つずつ外れていく。

鮮明になっていく視界と同時に、機体の灰色はにじみ出るように、色鮮やかな青と白に染まった　ハイパーセンサー最適化完了、フエイズ・シフト、展開……完了。

宇宙に上がったときのあの感覚、体がふつと浮上する　推進機正常動作、確認。

左腕を突き出せば光が包み、そこに盾が現れる　機動防盾……展開。

各種追加装備　使用可能装備無し。  
全システム　クリア。

『イグナイテッド  
- Ignited - 起動』

視界に映る起動の文字が消え、装甲が淡く輝きを放つ。  
背部のスラスターからの排気が、軽く周囲のものを揺り動かす。

見えるのは狭く、ちっぽけな世界。いつだって理不尽で、容赦無く俺を打ちのめしてきたはずの世界。

だけど確かに今この世界に、俺と『力』はあった。

起動動作が終了したのを確認した俺はすぐに、女の子をまた抱き寄せた。

「しっかりつかまっててくれよ」

「う、うん……」

驚きで目を見張る女の子に念を押し、抱え挙げる。左腕の盾でその子を覆うようにすると、右腕で腰のサイドスカートからダガーを引き抜き、地面から一メートルほど浮き上がって、ドアの方向に直った。

盾の装甲が押し広げられるように開き、スラスターに光がともされていく。

「行くぞっ!!」

体をぐっと前に傾け、背中と足のスラスターを一気にふかす。

邪魔な障害物をダガーで払いながら、加速をつけて倉庫を一直線に駆け抜けた。

生身だったら絶対に反応仕切れない速度でも、センサーが感知して体がそれに追従する。

のたうち回って揺らめく炎も、今は何の脅威でもない。

その勢いを保ったまま、ダガーを突き立てて倉庫の扉をぶち破り、さらには建物の壁も簡単に貫いていく。1枚、2枚……止まりはしない。

「はああああー！！！！！！」

壁を切り抜けて最後の窓を叩き割り、太陽の下にたどり着く。センサーを通じて見える世界では、光を反射して輝くガラスの破片が宙を踊っていた。

外に出られれば一安心だ。そう思って下に着地しようとしたけれど、止まらない。

いや、止まらないどころか

「げ、減速できない!?!」

空中制御が上手くできないせいで、ほとんど減速できなかった。マズい。この勢いじゃあ、向かいの建物に突っ込む。そろそろ腕の中にいるこの子も無事じゃいられない。

ダガーを放り投げて、両手で女の子を抱きしめる。前傾姿勢だったのを反転させ、足のスラスターを点火。無理やりに急降下して、背中から地面に接触した。衝撃が背中を激しく打って、体を震わせる。放り出されそうな意識は、スーツのおかげだろうか、なんとか繋ぎとめられた。

「止ま……れええええー！！！」

芝生のきれいに植えられた庭を、土を盛り上げて深くえぐっていき。それから庭を通り越して、外周のコンクリートの上で火花を散らしたところで、ようやく動かなくなった。

プスプスとコンクリートが煙を上げる。庭にいた人たちが大勢、慌ててこっちに走ってくるのが見えた。

「だ、大丈夫？ 怪我はない？」

まずは女の子の安否を確認。外傷はないはずだけど……

「だ……だいじょう……ぶ〜」

クルクルと目を回していた。あんな無茶に付き合ってたんだから、それも仕方ないか。

……でも、無事だった。助けることができた。守れたんだ。

「良かった……」

安心したらガクツと体の力が抜けた。そろそろ限界だったらしい。身にまとっていた装甲は、一瞬光ったかと思うと、もう消えていた。まぶたは重くて、目を開けているのがつらい。

「あ、お父さん!!」

「マユ!! 無事か!? 怪我は!? 大丈夫か!?」

「うん、平気! このお兄ちゃんが助けてくれたの!!」

「ああ、そうだな……っておい!! お前さん大丈夫か!? おい、タンカだ!! 誰かタンカ持ってこい!!」

マユ? 名前、マユっていうのか……なら、ホントに、守れてよかった……

その安堵がとどめの一押しだった。他の人が近づいてきているのに、逆に周りの喧騒は自分の耳からどんどん遠ざかっていく。

そういえば、俺はどうしてここにいるんだっけ……?  
まあ、今はそんなこといいか……

頭の中はごちゃごちゃしたまま。だから今は、何も考えないで眠りたかった。

「君! しっかりして!!」

「お兄ちゃん!! 大丈夫!? お兄ちゃん!!」

ほんのちよつと前まで、モビルスーツに乗って戦っていたのに……次に気付いたら、ステラに会えて……

今度は妙なスーツ着て、空を飛んでいて……

明日が、急に加速したみたいだ。

明日を生きるって大変だな

## プロローグ『加速する明日』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて溶けてしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・キャラ崩壊しているやもしれません。ご注意ください。
- ・作者の力量不足により、ご都合主義の超展開になっております。
- ・これまた作者の力量不足により、話が中途半端になっております。申し訳ありません。

## 第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』

やっぱり、思い出しても意味が分からない。

マユって名前の女の子を助けて、眠っちゃって……目が覚めてから聞かされた話は、あまりにも非現実的すぎた。

まず、ここは俺のいた世界じゃない。

コーディネイターはいないし、宇宙にプラントはない。地球にはオーブなんて国もないし、おまけにあんな悲惨な戦争状態でもない。ZAFTのこととか、モビルスーツのこと聞いても、そんなことは知らないと返されるだけだった。ありえない、とは思っただけど……新聞にテレビ、それ以外にも自力で手に入る情報を全部確認してみたら、どうやら本当らしかった。

ちなみに、建物の火事については……原因は不明らしい。武器の開発室から出火したせいで、可燃物や爆発物に燃え移ったりしたのがあれだけの大火事に繋がったらしい。でも、自動制御の防災機能が全部停止していたことが調べて分かった。それに肝心の、どうして開発室から火が出たのかは、結局分からないそうだ。

身元は不明だし、相手からすれば、意味の分からないことを言うこともあって、当然、初めのうちは俺が犯人じゃないかって疑われた。事情聴取されたり、いきなり病院に連れて行かれそうになったり、今度は怪しげな嘘発見器にかけられそうになったり大変だったけど……なんとか俺の言っていることは嘘じゃないって信じてもらえた。

かばってくれたのは葛城さんだった。

葛城さんっていうのは、俺がいた建物……「日本IS技術開発研

研究所・通称『葛城研』の主任の人で、マユのお父さんで……見た目はだらしのないオッサンだけど、かなり偉い人らしい。研究所も政府直属の研究機関ってことで、すごい重要な場所みたいだ。

葛城さんは、俺の言うことを信じてくれて、頼る当てのない俺の面倒をずっと見てくれた。それにも色々理由があって……大きな理由の一つは、俺が動かしたあのパワードスーツ……『IS』だった。

『IS』ってというのは、正式名称だと<インフィニット・ストラトス>っていう飛行型のパワードスーツ。宇宙進出に望みをかけて作られたらしいんだけど……戦争がしたい最低な奴らはどこにもいるみたいだ。ISはその性能を『兵器』として使われるようになって……結果として今は『スポーツ』として、各国の威信をかけて取り組まれているらしい。

俺のいた世界だったら、「戦争するのはもう金もかかって嫌だから、モビルスーツは兵器じゃなくてスポーツ用にしましょう」ってところか……？ モビルスーツでプロレスだなんて、きつと「頭部を破壊されたら失格」とかいうルールができるんだろうな。

どうして『スポーツ』なのかって？ 実は……ISには、『兵器』としてはとんでもない欠陥があった。なんとこれ、「女性じゃないと使えない」。そのせいで、女性の地位は飛躍的に向上し、この世界はどこでも「女尊男卑」の風潮。ここまで聞いたところで、俺の頭は一度パンクしそうになった。

女性にしか使えないって言ったのに、じゃあ俺の動かしたアレは？

それが納得できなくて聞き返したけど、返ってきた言葉は「分かるん」の一言。俺と同じ日にISを動かした男がいるらしいけど、こんな例は世界中どこにも無かったらしい。

それどころか、俺が動かしたIS『イグナイトッド』は、女性でも動かせなかった『欠陥中の欠陥機』で……パソコンでデータを取

れるだけ取れるようにして、後は倉庫にうつちやつてた、いわゆる出来損ない。でも、ISの中心部分のコアは動いたままで、後で確認したら、追加装備の設計に特殊装甲の形成とか、勝手にしてたそう。設計された装備の製造は、研究所が急ピッチでやってくれた。そういう訳で、俺はISを動かせるって理由でこの国……日本の政府の人たちに、国籍とか戸籍とか、身分証明になるものをすぐに発行してもらえた。国のお偉いさんにとって、自国所属のIS操縦者が一人増えるだけでも大きな力になるから、なんとしても困い込んでおきたいってことみたいだ。ISのコア自体は登録されたものだから、自分の国のものだって言い張れるし。外部にも俺の情報はあまり出してないって話だ。

それで国の研究所の責任者としては、データを取るのと監視に都合がいいからって言って、葛城さんは俺を研究所に置いてくれたんだ。

『なあに、安心しろ。お前さんがそれを動かせる限り、誰も下手に手出しはできないさ。』

それに、お前さんがマユを救ってくれたんだ。これぐらい……あの子の親としてさせてくれ。マユもお前さんのことを気に入ってるからな』

笑って言うてくれたその言葉が、とても嬉しかった。

それから、1カ月以上の研究所での生活。ISとかこの世界のことを勉強して、実験のためにISを動かして、葛城さんの子ども……マユと遊んで。お母さんは、早くに亡くしたそう。マユは俺を見つけると飛んでくるから、空いている時間はほとんど、マユと一緒にいた。二人で料理をしたり、テレビを見たり、動物園に連れて行ったり……戦争がないってことは本当に平和で、まるでオーブに戻ったような時間が続いた。

こんなに幸せでいいのかって、初めのうちはずっと思ってたんだけど……マユに言われて、俺は自然に笑えるようになってたことに気付いた。誰だって、自分の大事な人には幸せでいてほしいって言われて……今の生活を、受け止められた。

もちろん、帰るつもりがないわけじゃない。まだあの世界でも、俺のできることがあるはずだって、はつきりと分かった。戦争のない、平和な世界の大切さはここで暮らしていて、あらためて感じた。……俺は戦争を無くすために戦う。それには、誰かにすがらないで、自分で答えを選ぶことをしなきゃって、思えるようになったんだ。

……けれども、帰る方法は全然見つからなかった。葛城さんでも、俺が元の世界に帰る方法は、さっぱり分からないって言ってたし……

それに、そのまま研究所暮らしをしていられるわけじゃなかった。俺は公立IS学園の入学を決定させられたんだ。しかも半強制。

IS学園は、日本にあるIS操縦者の養成機関で、世界の各国から生徒が集められて、候補生として勉強をする場所……だそうだな。まさかアカデミーを出た後に、また学校に逆戻りなんて思わなかった。けど、国にも建前つてものがあって、ここに入学させないと政府としても面倒なことになるらしい。卒業後もうちの国でよろしくって偉そうな人たちが頭を下げている光景は、スポーツのスカウトそっくりだった。

それで俺は、今日からは学校での寮生活が決定していた。マユと離れるのは寂しいけど、IS学園は全寮制だから仕方ない。居候生活も、結構心苦しいし。

とにかく俺は、目の前の明日を精一杯生きるだけだ。それが約束なんだから。

失った過去も、今ある現実も、その先の明日も……大切なもの全てを、守ってみせる。

みんな見ててくれ……！！俺は今度こそ……！！

そうやってIS学園に勇んでやって来たのが、ほんの少し前のこと。

さっきまでの真面目な話はどこへやら……今の俺は校門の前でプレッシャーに負けて、頭を抱えたパンダな状況だ。

ええい！ このままここに突っ立ってても、埒があかない！

頭から手を離して、貝殻の欠片を通した首飾りを握りしめる。ステラにもらったものを模した、俺のIS『イグナイトッド』の待機状態だ。

……ステラ、俺に力を貸してくれ。

ほんの少しの間目を閉じて、よし、覚悟完了。意を決して、足を踏み出す。

それに、希望はある。

俺と同じ日に、この学園の入試でISを起動させた男子。そいつと一緒になら、きっとこの現状から抜けだせる。

視線の集中砲火にざわめきの網をかいくぐって、俺は教室に向かって歩き出した。

「えーっと、1年、1組……あつた、ここだ」

俺のクラスは1年1組。扉は残念なことに閉まっていた。扉の開く音で、確実に視線がこっちに向くから嫌だったのに……はあ、しようがない。

なるべく音を立てないように開けたけど、教室の中にいた女子が何人が俺に目を向けた。

「…………あれ？ 男子が…………二人？」

誰かがそう言ったら、教室中の目が俺を捉えてざわざわと困惑した声が覆った。

でも俺はそんなこと気にならなかった。俺の視線の先には、椅子に座って、文字通りに身を縮めている男子がいたからだ。

間違いない。俺と同じパンダ…………じゃない、男だ。自分のことで手一杯なのか、まだ俺に気づいていない。気持ちは痛いほどよく分かる。

教室に入ったら、ざわめいていた教室は水を打ったように静かになった。コツコツという足音だけが響く教室のど真ん中、最前列の席へ。

「良かった。同じクラスになれたんだな」

「え…………？ だ、誰だ？」

俺に向けられたのは、困惑と驚愕の入り交じった表情。でも、すぐにそれはほっとした、安心の表情に変わった。同じ存在を見つけた安心感が、身をまとっていた緊張を急速にほどいていく。

「男子…………俺以外の…………！」

「ああ。俺、シン。シン・アスカっていうんだ。よろしく」

「あ、俺は一夏。織斑一夏だ！ よろしくな！」

そして交わされる硬い握手。次の瞬間、割れるような…………

「…………きゃあああああ—————っ…………！」

本当に窓ガラスが割れるんじゃないかって思えるぐらいの、悲鳴にも似た叫びが教室を振るわせた。

「男子！ 嘘！？ 何で二人！？」

「やった！！ 神様このクラスに入れてくださってありがとうございます！！  
います！！ 来年のお賽銭は奮発して500円入れます！！」

「男の熱い友情！！ 今年の夏コミはこの二人で決まりね！！」

きやあきやあとはしゃぐ女子の集団。他の教室からも、何事かと人がわらわら集まってきた。おいおい……さつきより状況が悪くなってるぞ……

真剣に教室外への脱出も考え始めたところで、都合よくチャイムが鳴った。女子は全員クモの子を散らしたみたいに行く。助かった……

「席、隣みたいだな。改めて、これからよろしくな」

一声かけて席に着くと、一夏も笑ってそれに答える。

一夏はかなり気さくな性格みたいだ。良かった。これなら打ち解けるのもすぐだろう。

「俺のほうこそ、男子一人で心細かったから助かった。あ、呼ぶときは一夏って呼んでくれ」

「ああ、俺もシンでいいよ」

軽い会話を交わすけれど、それもすぐに緑色の髪の女の人が入ってきて終わった。

……あれ、試験の時のあの人だ。副担任の山田真耶って自己紹介したから……先生だったんだな。てつきり生徒だと思ってたんだけど。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」  
「……………」

可哀想なことに真耶先生に反応する声は全くなかった。俺も反応してあげたかったけど…………背中を感じる視線がそれを妨害する。

正直、甘い考えだった。男子が二人なら、少しはこの視線の雨も納まるんじゃないかって。そんな単純じゃなかった。

珍獣が二頭に増えれば、それに伴って視線の質が二倍に…………つまりはパンダの抱き合わせだ。周りのお客さんは大喜び。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ここは学校の教室じゃなくて、作戦前のブリーフィングルームの間違いじゃないのか？俺の知っている教室とは、緊張感がまるで違った。余裕がない。

一夏も俺と同じみたいで、ちらりと目を窓側に向ける。目が合ったその女の子はぷいと顔をそむけ、心なしか一夏は肩を落としていた。知り合いか何かか？

「えっと、次は…………シン・アスカくん。自己紹介お願いしますね」  
「は、はい！」

もう自分にお鉢が回ってきた。ヤバい、何も考えてない…………振り向いて教室を見渡す…………視線が痛い。下手なことを言うわけにもいかないし、逆に何も言わないのも問題ありそうだし…………

「え…………し、シン・アスカです。一年間よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる合間にも、脳をフル稼働させて次の展開を

模索する。

何をしゃべれば良い？ ありきたりだけど趣味についてか？ しまった……趣味なんて読書ぐらいしか言えないぞ。な、なら得意な事は……ナイフ戦か？ いや、物騒すぎて確実に周囲は引く。他には……モビルスーツの操縦なんて言えるわけないだろ！！ まずいマズイ不味い……！

「え〜つと、アスカくんは皆さんより年が一つ上ですけど、特例でこの学校に入学することになりました。皆さん仲良くしてくださいね」

にっこり笑って付け加えてくれた山田先生。助け舟、ありがとうございます。

「年上なんだ〜。あこがれちゃうな〜」

「年上！？ ならシン×一夏より、一夏×シンよね……」

女子の反応の音が、俺に再考の猶予をくれる。年上……そういえばそうだった。よし、これを取っ掛かりにすれば！！

「えつと、俺は皆より年上だけど……ぜんぜん気にしないで、俺のことは気軽にシンって呼んでください！ 敬語もいりません！ とにかく、よろしくお願いします！！」

なんとかここまで言って、勝手に席に座った。もうこれ以上は無理だ。女子はまだ不満そうだし、山田先生はオロオロしてるけど……申し訳ありません、無理なんです。

はあ……悪いけど、まともな自己紹介は一夏に頼もう。

「……織斑一夏くん。お願いします」  
「は、はい！」

お、一夏の順番か。どうだろう、俺より上手くできるのかな？

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

とりあえず最初に自分の名前を言う。問題は次からなんだけど……  
一夏を見上げてみれば、まだ緊張した様子で……次のセリフが出てこない。

少しの間を置いて、口を開いて出た言葉は……

「え……以上です」

数人の女子が、がたたつと机を揺らした。そんな期待するなよ！  
あれ凄くツライんだぞ！？

心の中で一夏のフォローをしていると、ふと、立ち尽くしている一夏の背後に誰か近づいて来たのに気付いた。その人は手にしていた出席簿で一夏の頭を叩く。すさまじい速さと正確さ。

「げえっ、関羽!?!」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

まるでコントのようにスパスパ頭を叩かれる一夏。息もぴったりだ。

凜とした、って形容するのが一番合うだろう。黒のスーツを着こなして、鋭い目をクラスに向けるその人のまとう雰囲気は……軍人のそれと全く同じだった。

女の人は織斑千冬って名乗った。織斑……ってことは一夏の親戚



られる……

ため息が出たけど、それもチャイムの音でかき消された。

「ゴメン。年、一つ上だったのか。ホントに敬語なしでいいのか？」  
「いっていいって。気を使われるのも嫌だし」  
「そう言ってくれると助かるよ……なにせ二人だけだもんな……」  
「ああ……だよな……」

一時間目が終了した休み時間。俺達は二人して、教室の雰囲気  
に呑まれつつあった。それはそうだろう？ 俺達の見物に来る生徒が、  
他の学年からも来ていて廊下まであふれてるんだし……

「ちょっといいか」

「え？」

そう言っで一夏に近づいてきたのは、窓側に座っていたさっきの  
ポニーテールの女子だった。なんだか不機嫌そうな顔で、雰囲気も  
硬い。

「……筈？」

「やっぱり一夏の知り合いか。誰なんだ？」

「ああ、幼馴染の……」

「篠ノ乃だ……こいつを借りていくぞ。廊下でいいな？」

「あ、でも……」

俺の方を横目で見る一夏。猛獣の檻に一人残していくようなこと  
が心配だったらしいけど、知り合いがいるなら邪魔をするのも悪い

だろう。

「俺のことはいいから、行ってこいよ」

「ああ、わりい……」

二人は廊下に出て行った。後にぞろぞろと女子を引き連れて……視線の半分ぐらいはそっちに誘導された。ふう、これで少しは……

「あのっ、アスカくん!!」

「へ……? うわっ!？」

安心した途端に、俺の机の周りは女子に包囲されていた。さつき篠ノ乃が一夏に声をかけたのがきっかけで、皆が後に続けといわんばかりにこっちに寄ってきたみたいだ。

「ねえねえ、ISを動かしたのはいつ!? どうやって!？」

「趣味は!? 特技は!? 好みの女の子のタイプは!？」

「身長・体重・座高に血液型は!？」

「同じ学年だけど、先輩って呼んでもいいですか!？」

「男の子に興味は!？ 攻め、受けどっちが好き!？」

質問が機関銃のように浴びせられる。当たり前だけど、全部に答えられるわけ……というかいつぺんに言われたら……

「ご、ゴメン!! 一斉に質問されても答えられない!!」

「あ、そっかー。じゃあ、アレ用意しなきゃ!」

そう言つとみんな大人しく席に戻っていった。ん……? アレって何だ?

首をひねっていたらチャイムが鳴って、一夏と篠ノ乃が帰ってきて

てた。篠ノ乃は相変わらず不機嫌な顔つきのままで、一夏はそれを見て首を傾げるばかりだった。

後で発覚したんだけど、アレとは分厚い質問表のことで、俺と一夏はそれを書かされるはめになった。勘弁してくれよな……

「悪いな、シン……いきなり迷惑かけて……」

「気にするなよ。まあ、電話帳と間違えた、は流石にマズイと思うけど……」

今度は二時間目終了後の休み時間。机にうなだれながら一夏はさっきのことを謝ってきた。

というのも、一夏は授業の予習を全くやっていなかったらしい。必読のはずの参考書を、電話帳と間違えて捨てたというのが原因でそれに、正直にそのことを話してしまったせいで、また織斑先生に頭を叩かれていた。

そういうわけで、参考書の再発行までは、俺と一緒に参考書を使うことになり……ついでに、授業の補修も俺と受けることになった。実は俺も、参考書はたいして頭に入っていない……ISの動かし方に整備の仕方、IS戦闘の戦術とか……そういうのばかり勉強していたせいで、他のことはさっぱりに近かった。

……俺だって昔と違って『ISなんて、実際に動かせりやそれで良い』なんて思っていないさ！ただ、『他は……別に後回しでもいいや』って思ってただけだ！

「と、とにかく放課後はがんばろうな！きっとなんとかなるって！」

「そ、そうだよな！」

「ちょっと、そこのお二人、よろしくて？」

「ん？」  
「へ？」

無理に二人で作り返しをしていたら、長い髪をした金髪の子が近づいてきた。手を腰に当てるその姿は、どこことなく品がある……気がする。

「また一夏の知り合いか？」

「いや、知らないけど……」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？ やはり男とというのは……二人もいるとは聞いていませんでしたけど……まあ、程度が知れますわね」

その口ぶりは、知らないという俺達をあざけるようで、気持ちの良いものじゃなかった。なんなんだよコイツ……代表候補生とか言つて……あれ？ 代表候補生って何だ？

目の前の女子に聞くのも癪にさわるから、隣の一夏に聞くことにする。

「「「なあ、一夏」」」

そう言うと俺達は顔を見合わせた。きよとんとした顔で。

「「代表候補生って何？」」

きれいに声が重なった。ついでに、クラスの子が数人ずつこけた音も聞こえた。

「「……へ？」」

間の抜けた声もきれいに重なった。どうやら俺達はお互いに、最低限知らなきゃいけないことも知らないぐらい勉強が足りないらしい。今日から真面目に勉強しよう……心に固く誓った。

セシリアとかいう女子はわなわなと肩を震わせて、机を勢いよく叩く。

「あなた方っ、本気でおっしやってますの!？」

「おう。知らん」

「自慢げに言うなよ……」

言い訳は無駄とでも言うように、堂々と言い放つ一夏。変に見栄を張らないだけ立派というか、バカ正直というか……あんまり人のこと言えないけどさ、俺も。セシリアも呆れてぶつぶつ何かを呟いていた。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……単語から想像したらわかるでしょう」

「そっついわれればそっだ」

一夏はさらりと会話を流していく。というか、代表候補生ってそれだけのことだったのか。

「そう！ エリートなのですわ！」

俺たちの様子にお構いなく、また機嫌よくしゃべりだした。エリートなのを殊更強調したいらしい。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

ることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

流石にうつつとうしくなってきた。でも、相手をしないとうるさいだろうし、したらしたで面倒くさい……まったく。

「そうか。それは俺たちラッキーだ」

「……あなた方、馬鹿にしていますの?」

「別にそんなわけじゃないさ」

俺も一応の否定はしたものの……一夏まで、軽く皮肉混じりの返答になってきた。

「まあ、わたくしは優秀で優しいですから……ISのことで分からないことがあれば、そうですね、泣いて頼まれればあなた方に教えて差し上げないこともなくてよ? 何せわたくし、入試で、唯一！教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ? 俺も倒したぞ、教官」

「あれって倒せば合格じゃなかったのか?」

「は……?」

そう言えば入学が決定した翌日には、試験つてことで研究所で模擬戦をした。相手はあの山田先生で……全然向かってくる気配がないから、こっちから仕掛けて、組み倒してナイフを首に当てて終了。何でこっちに来ないのか不思議だった。教官なら、避けられて壁に衝突して沈黙、なんてドジな事もしないと思うのに。

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」

動揺を隠しきれない様子で、セシリアが言った。そんなこと俺達

に聞かれてもな……

「女子ではってオチじゃないのか？」

一夏が答えたら、ピシッと何かに亀裂が走る音がした。あ、たぶんコレ危険信号だ。

「あなた方も教官を倒したと、そういうことですよ!？」

予想した通り。ヒートアップして顔を真っ赤にしながら、セシリアがこつちに詰め寄る。今にも掴みかかりそうな雰囲気だ。

「お、落ち着けよ。な？」

「そうそう、一度落ち着いたほうが……」

「これが落ち着いていられ」

授業開始のチャイムの音が鳴って話を遮った。今の俺達には鐘の音が福音に聞こえ

「また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって!？」

第一ラウンド終了のゴングだった。三時間目インターバルの後には、もう一度戦いのゴングが鳴る。

「シン……審判はどこだ？ 降参だ、タオルを投げ入れてくれ」

「逃げるなって言ってたから……そんなことしたらリングの外で乱闘だな。きつと」

お互いの考えを読めたわけでもないのに、俺達の口からは打ち合わせたかのような言葉が出た。二人で顔を見合わせて、ため息。

「「はあ……」」

今度のため息は、教室に入ってきた織斑先生の声にかき消された。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目の教壇に立つのは織斑先生みただ。山田先生までノートを取り出してるんだから、大事な授業なんだろう。へっへーん、これならばうちり予習してあるぞ！

内心でガッツポーズを取る俺。背筋を伸ばして、さあ授業

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

クラス対抗戦に、代表者？ 織斑先生、そんなの後回しにして授業してよ、授業。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

俺の思いも虚しく、代表者についての説明を丁寧にする織斑先生。普通の学校という学級委員長ってことか。まあ、誰かがやってくれるわ。

「はいつ。織斑君を推薦します！」  
「私もそれが良いと思います！」

一夏を推薦する声が女子からあがった。隣の一夏の顔をうかがってみれば、心ここにあらず、といった顔。気付いてないな、コレ……

「一夏、お前の名前呼ばれてるぞ」

「……は？ ちよつ、俺！？」

「自薦他薦は問わないぞ。他には？」

一夏は慌てて席を立つけど、流れはこのまま一夏で決定だろ

「はいつ！ 私はアスカ君派ですっ！！」

「そうそう！ アスカ君の方が良いと思いますっ！！」

……流れが変わった。というより、分断した？

「え〜？ 私は織斑君の方が良いな〜。なんだか優しそう」

「いや、ここはアスカ君じゃない？ あの赤い目、かっこいいよ〜」

「私は……織斑君の方がタイプかも」

「いつそのこと二人まとめては、ダメ？」

クラス中がきゃあきゃあ騒ぎ出した。ていうか俺もかよ！？

「待ってくれっ！ どうして俺も！？」

立ち上がって振り向けば、期待やら好奇心やらの視線が俺を貫いた。恐る恐る隣の席の子の顔を見れば……『ごめんなさい、でも、私は織斑君派なの。あなたの気持ちには応えられないわ』みたいな

顔をして、目を逸らしていた。いや、俺にはそんな気持ち無いから。後ろの席の子は……『大丈夫ですっ！ 私はアスカ君派ですっ！』  
っっていう顔でにっこり笑い、親指をぐつと立てていた。えっと、全然大丈夫じゃないから。

「静かにつ！ 織斑、アスカ、二人とも邪魔だ、席に着け。推薦は二人、投票で良いな？」

織斑先生の容赦のない一声。一夏と二人で待ったをかけようとしたその時、俺達より先にセシリアが声を張り上げた。

「待つてください！ そのような選出認められません！」

ああ、俺も認められない。もっと言ってくれ。ていうか、あんたが代表になってくれ。

「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……どういう意味だ、それ。

「物珍しいという理由だけで極東の猿にするなんて、わたくしこのような島国にまでサーカスをしに来たのではなくてよ！」

……おい。なんだよ、その言い方。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

おい。分かったからもう良いだろ。静かにしてくれよ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で」

ブチッ！ コイツ！ いい加減にしるよ！！

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

「そのエリート様だったら、さぞかし立派な料理ができるんだろうな。あんたは」

「なっ！？」

堪忍袋の緒が切れた。後ろをにらみつけてやれば、セシリアは顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「あつ、あなた方！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「エリート様のくせに、そんなことも分かんないのかよ？」

「なっ、なんですって！？」

一夏ははっと、言い過ぎたって顔をしていたけれど、俺の方は売り言葉に買い言葉。勢いは止まらなかった。

「お二人、決闘ですわ！」

セシリアが思いっきり机を叩いた。上等だ。相手になってやる。

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「ふん！ やってやるさー！！」

一夏も覚悟したようだ。もう引くに引けない状況だから当然か。

「決闘は二対一、わたくし一人ですが……まあ、ちょうど良いハンデでしょう」

「そうだな、二対一なら負けても言い訳になるもんなあ?」

「っ!? あなた、まだ言いますのっ!？」

「いい加減にしないか! ……話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。三人とも用意しておくように。それでは授業を始める」

織斑先生が手を叩いたところで、話が終わった。

さつきまでクラスを包んでいた熱気も、沸騰していた俺の頭も、授業が進めばすぐに収まっていった。

……冷静になれば、言い過ぎた。この国の人を馬鹿にするようなことを言われて、我慢の限界で、俺達二人とも口が滑った。ケンカ腰で相手に突っかかるのは良くないって、艦で学んだはずなのに……  
よみがえるアスランとの確執の日々。お互いに自分のことを話さず、相手の言うことを聞かず、衝突し、すれ違い、拳句の脱走、追撃。そして

ああ、悪夢だ。そんなことはもうゴメンだっと思ってたのに……

……まあ、仕方がない。話して聞く相手じゃなさそうだし。

それにイギリス代表候補生だかなんだか知らないけど、そんな相手に負けるぐらいじゃ……明日を、大切な全てを守るなんてできない。

勝ってから、セシリアにちゃんと謝るとしよう。

そうだ、後で一夏にも謝らないと……ケンカを売ったのも半分以上は俺なんだし。

いや、今は目の前の授業に集中しなきゃ……

黒板の板書が、気付けばとんでもない量になってる。慌てて俺はノートにペンを走らせた。これからまた、大変そうだな。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてひびが入ってしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

## 第二話『本当の決闘は明日!』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・勝手な都合により掲載が大幅に遅れました。この場を借りて謝罪します。すみませんでした。
- ・相変わらずのご都合、急展開です。
- ・今回特に期間が開いたため、違和感が生じる箇所があるやもしれません。

## 第二話『本当の決闘は明日!』

「うっ……い、意味が分からん……シンは分かるのか？」  
「なんとなく……ってぐらいかな……」

入学式の日。放課後になり、俺と一夏は机に沈没していた。

一日の勉強もあまり理解できるものじゃなかったうえに、慣れない環境の追い打ち。女子はみんな俺達について来るし、こっちを指差して何か言ってるし……現在進行形で。

「あゝ、まるでウーパールーパーだな」

「ウーパールーパー……？　なんだそれ？」

「昔流行った珍獣の名前。どんな動物かは知らん」

「だったらパンダの方が分かりやすすくないか？」

「パンダ……どっちにしる珍獣だな」

珍獣からは脱却出来そうになかった。しばらくは透明な檻の中の珍獣さんか……

レイ、助けて。俺達パンダになりたくないよ。ウーパールーパーとかも嫌だけど。

「織斑くん、アスカくん。良かったです。まだ二人とも教室にいたんですね」

顔を上げれば、そこに立っていたのは書類を手にした山田先生だった。

「はい？」

「どうしたんですか？」

「えつとですね、織斑さんの寮の部屋が決まったので……はい、これが番号と鍵です。それに、アスカくんも」

ああ、鍵は今日受け取るようになってたっけ。俺達二人はそれぞれ、部屋の番号が書いてある紙に鍵を受け取った。全寮制ってのは聞いてたし、俺も慣れてるから問題ない。ただ……部屋の番号が俺と一夏で違うのが気になった。男二人で相部屋、じゃあないのか？

「俺の部屋、決まってるじゃないんじやなかったですか？ 一週間は自宅から通学って話でしたけど」

「今日から寮に入るのは決まってるけど……一夏と同じ部屋じゃないんですか？」

二人で山田先生に質問をぶつけると、先生は少し言いにくそうに俺達に説明を始める。

「織斑くんの方は、寮に入れるのを最優先にしたみたいで……用意していた個室はアスカくんの方に割り当てられたので、しばらくは織斑くん、相部屋で我慢してください」

説明を受けて納得はしたものの、女子との相部屋ということ、一夏は少し戸惑っているようだった。なんで俺の方が個室なんだ？ 女子を一人個室に入れれば……  
そう思って口を開きかけたら、山田先生がヒソヒソと声をひそめて言ってきた。

「アスカくんの事はまだ、あまり政府は情報を出したからないみたいで……個室になったのも、そういう理由なんです。少しだけ、ガマンしてください」

言ってしまったえば正体も身元も不明だった俺に関しては、政府も慎重になっっているみたいだ。表立って出てた情報も、ほぼ全部一夏のものだったしなあ……そのせいで、一夏の方は大分面倒なことになっってるらしい。身代わり羊みたいで、ちょっと悪い気がする。

「なんか俺だけ個室って悪いな。ゴメン」

「別にシンのせいじゃないだろ？ そんなこと言わなくていいって」  
手をひらひらさせながら一夏が答える。気の良い奴だな、ホントに。

「で、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

そう言っただけで威圧感たっぷりに登場したのは織斑先生だった。そのプレッシャーがあまり俺の方に向いていないのは幸いだけど、一夏の方は悲惨だ。同情する。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。足りないものがあつたら、アスカ、お前が貸してやってくれ」

「はい、了解です」

「……敬礼はいらん。ここは軍隊じゃない」

「えっ！？ あ、すみません」

気付いてみれば右手を上げたあのポーズ、勝手に体が敬礼をしていた。ちょっと周りを見てみたら、皆が不思議そうな顔をしている。いけない。この人の雰囲気、軍の人たちそっくりだから……気をつ

けよう。あんまり良い顔してないし。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。大浴場は……今のところ二人は使えません」

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

自分の言ったことの意味に気付いて、がつくりと一夏がうなだれた。周りが女子だけって大変だ。風呂に入るっていう当たり前の事にも、気を使わなくちゃいけない。

「えっと、それじゃあ私たちは、会議があるので、これで。アスカくん、織斑くん、道草食わないで、ちゃんと寮に帰るんですよ」

「食いませんよ。食べてるところを見物されて指さされるのがオチです。教室を出て行く二人の背中に、心の中で呟いた。設備の見学は……明日アリーナと整備室の場所だけ確認しておこう。後はまあ、おいおいで構いやしないさ。」

「千冬姉も、自分のプレッシャーを分かってくれよな。敬礼の一つや二つも自然と出るって、なあ？」

「え？ あ、うん。織斑先生、ちょっとおっかななくてさ」

さっきの敬礼の事を冗談めかして、一夏が笑った。つられてこっちも笑うけど、やっぱり敬礼するのは不自然だったかな……いや、あれぐらい、大丈夫だろ。

「じゃあ、部屋に行ってみるか。後でシンの部屋にも行ってみていいか？」

「もちろん。何かあったら俺の部屋に来てくれよ。相部屋だと、大変だろうしな」

「悪い、ホント助かる」

回りのはしゃぎ声に反応する気力も、とっくに尽きている。二人で席を立て荷物をもとめて、外に歩いていった。せめて部屋だけでも安息の地であってほしいと思いつつながら。

部屋に入ってみれば、艦にいた時よりはるかに豪勢な様相だった。シャワーも付いているし、キッチンまであるし、ベッドは大きいし……ホントに一人部屋？

荷物を部屋の隅に置いて、ベッドにそのまま倒れこんだ。疲れた体をベッドのフカフカが抱きとめてくれて、とても気持ちがいい。「うえ……疲れた……」

この世界に来てから、久しぶりに慌しい一日だった。最初の方のゴタゴタさえ無ければ、マユと一緒にのんびりと暮らしてただけだったから、それも当然か。ああ、そうだ。

制服のポケットから携帯を取り出した。ピンク色の携帯は、オーブにいた時からずっと変わらない。同じマユの写真が入っていて、同じマユの声が聞こえて……それを聞く俺だけが、あの時とは変わっていった。

「はい、マユです。でもごめんなさい。マユは今、電話に」  
「マユ……ごめんな、俺」

何度携帯を開いても、何度マユの声を聞いても、笑うことなんてできなかった。いつでもそれは辛いことで、心が苦しくて。思い出すのは楽しかったことなのに。この世界で会ったマユの前では、笑えるようになったのに。

「どうして、お前の前じゃ笑えないんだろっな……」

同じマユなのに、俺が見せられる表情はまるっきり違う。それじゃダメだって、分かってはいるんだ。

俺が守れなかったマユも、今この世界にいるマユも、二人とも俺の大切な人だから。いつか笑ってこの携帯を開けるように。過去と明日を守れるように。

「俺……がんばるからな。だから、マユ……また明日」

そつと携帯を閉じて制服にしまうと、一日の疲れがどつと押し寄せてきた。このままうとうと眠りの世界に……まだ食事も済んでないけど、今日はいいか。

部屋の外からはまだいろいろな声が聞こえたけど、それも気にならなかった。悲鳴のような叫びも、ここじゃあ日常茶飯事なんだからきつと。

……でも、何かゴスツという硬いもので頭を叩いたような音も聞こえた。気のせいかな、うん。

それから決闘の当日まではあつという間だった。

連日の女子の包囲網をかくぐって、俺と一夏はなんとか学園生活が続けられている。人間、慣れれば案外どうとでもなるんだな。問題なし。

授業は相変わらずさっぱりなモノも多いけど、山田先生が放課後の補修をしてくれるから、なんとかなりそうだ。よし、こつちもオツケー。

補修が終わったら、俺はアリーナでISの訓練。まだISを持っていない一夏には、篠ノ之が指導をすることになっていた。篠ノ之のお姉さんはISの開発者だし、教えるには慣れた人の方が良いだろうって話だ。これで完璧。万全の状態で月曜日が……来るはずだっただけだ。

「なあ、等。ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「篠ノ之、俺も質問して良いか？ それってどういうことだ？」

「目をそらすな」

事態は深刻。一夏の訓練はほとんど剣術だけで、肝心のISの訓練ができていない。おまけに、一夏は専用機すら届いていない。つまり、戦えない。万全どころか、問題外。

「篠ノ之！ お前が『一夏には私が全て教えるから、任せておけ』って言ったんだろ！ どういうことだよ！？」

「あ……ISも無しに訓練などできないのだから仕方がないだろう！」

「だからって、知識とか基本的なこととか、もう少し教えてくれても良かっただろ！？」

「目をそらすなっ！」

当日まで安心しきっていた俺達は、現状が非常に危ういことになんの疑問も持たなかった。一夏は俺に聞くて選択肢を忘れていたし、俺は俺で自分の訓練に夢中で……

三人とも、二の句が継げなかった。アリーナのピットを、重々しい沈黙が包む。

「こうなったら俺一人でなん「織斑くんっ！ 専用ISが届きましたよっ！！！」」  
「「え？」」

転びそうな勢いで駆けてきた山田先生。その後ろからは、織斑先生も来ていた。ていうか、もしかして間に合った？

「織斑、すぐに準備をしろ。ぶつつく本番でものにしろよ。アスカも早く動け。アリーナの使用時間は限られているんだ」

「え？」

「は、はい」

「敬礼はいらんと言った」

「一夏、この程度の障害は軽く乗り越えてみせる」

「え、あの」

「「早く！」」

ピットの搬入口が開くと、その向こうには真っ白なISがあった。騎士の鎧、が第一印象だ。俺が始めてISを見つけたときと同じように、コイツも一夏のことを待っているみたいだ。開かれた装甲が、そんなことを思わせる。

「これが」

「はい！ 織斑くんの専用IS『白式』です！」

「すぐに装着しろ。フォーマットとフィッティングは実戦でやれ、

いいな」

「アスカくんも、早く準備しないとっ！」

「了解です」

一夏も準備を始めたんだ。俺も集中しないと。

一瞬だけ目を閉じて、首から提げた貝殻を握りしめる。瞬間に、全身を灰色の装甲が包んで、次いでフェイス・シフトの白と青が染め上げていく。

光と共に盾が現れて、それを腕に付ける。盾に刻まれた十字を中心に、一回り大きく展開した。

アリーナの先にいる相手の情報が眼前に映し出される。

操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り

了解。ある程度の下調べはしてきてるから、そこまでは知ってるんだけどな。

「一夏、いけるか？」

「ああ」

「……やっぱり最初は不安か」

「大丈夫だ……って言いたいけど、嘘はすぐばれるよな」

軽く笑う一夏だけど、緊張した声なのはすぐに分かってしまう。

俺だって初めてMSに乗った時、訓練だったのに手が震えたもんな。緊張するのは、当たり前だ。後ろの三人も、今は明らかに不安な表情が見て取れる。

「安心しろよ、一夏」

「え？」

「俺が、お前を守るからさ」

「あ、ああ……」

そうさ、守ってみせる。こんなところで負けさせやしない。負けたりしない。

「フォーマットとフィッティングの時間は俺が稼ぐ。一夏はそれまで攻撃は控えてくれ。足を止めるなよ？ 動きまわらないと、良い的にされるからな」

「お、おう。筹、行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

黙ってうなづく一夏。ゆっくりゲートが開くと、相手は俺達を悠々と待ち構えていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

身に付けるのは青いIS『ブルー・ティアーズ』。装備はレーザーライフル『スターライトmk?』。特殊装備は機体名と同じ自立起動兵器……ドラグーンと同じ、か。セシリアの装備は中距離に特化している。一番厄介なのは、あの自立兵器だ。二人同時に相手をするのも苦じゃないだろう。

「最後のチャンスです。今ここで謝るのなら、二人とも許してあげないこともなくつてよ」

「悪いけど、謝るのは俺達が勝った後だ」

「それに、そういうのをチャンスとは言わないな」

「そう、残念ですわ。それなら」

セシリアがこっちに銃口を向けた。もう試合は開始されているから、撃つてこられても文句は言えない。被ロックオンを確認、狙いはよし、俺のほうか。

「お別れですわね！」

閃光が走り、空を裂いた。左肩の辺りを狙っていたみたいだけど、それをかがみながら避ける。体を上げながらライフルを手にして、それをセシリアに向ける。

「一夏！ 散開するぞ！」  
「おうよ！」

二人で左右に分かれ、狙いを分散させる。なるべくこっちに射撃が来るように、ライフルを突きつけてけん制する。

「二手に分かれても、わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの前では無駄ですわ！ さあ、仲良く円舞曲フルツを踊りなさい！」

来た。四機のブルー・ティアーズ 言い換えると、ビットつて言つらしい が飛び立ち、一斉射撃を開始する。それもほとんどが一夏の方を狙っている。フィッティングの済んでいない一夏の機体じゃ避けきれずに、何重にも被弾していく。

「くっ！」  
「一夏！」  
「よそ見している暇はなくてよ！」

一夏の援護に入ろうとした俺の前を、レーザーが横切つていった。にやりと笑うセシリア。銃口は俺に向いたままで、自分にも一夏にも近づけるつもりはないらしい。それでも、構ってなんていられるか。セシリアに背を向けて、スラスターを加速させる。ライフルの

射撃を旋回しながら回避、ビットの群れにライフルを撃って、距離をとらせた。

「武器は何かないのかっ!?!」

「装備、装備はっ!?! 近接ブレードだけかよっ!?!」

射撃武器も存在しないらしい。ビットにはほとんど対応する術がないわけだ。なら

「ビットのけん制は俺がやる! 一夏は被弾しないように、セシリアだけ見ててくれ!」

胸部のバルカンをビットに発射。直撃することもなく、すいと避けられた。ふわりと浮いたビットの照準が一夏から俺に変更される。引きつけられれば、十分だ。

「やってみせるさ、俺はあっ!?!」

試合開始から三十分近くが経過した。

「二十七分。持った方ですね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも……」

正確には二十七分らしい。セシリアの嘲笑に、一夏は力なく答えた。

一夏のエネルギー残量は大分削られたけど、この程度なら十分に持つはずだ。俺も被弾はほとんどないし、ビットの動きもドラグーンに比べればたいしたことない。一夏のISのフィッティングが完

了すれば、このまま勝てる。

「特にあなたはしぶといわね……でも、逃げてばかりでは勝てないのは分かっています？」

「ふん、逃げてただけじゃないさ」

セシリアは周囲に浮かぶビットを撫で、余裕を見せながら笑う。こっちが意図的に手数を減らしていることには気付いていないみたいだ。

「さあ、そろそろ閉幕と参りましょう」

ビットが再び接近してくる。四機が俺を囲い込み、レーザーの弾幕を張る。でも、動きがおかしい。俺に当てるつもりじゃなくて、俺が動けないように網を作りあげている。どうして……っ！ そういうことかよ……！

俺がセシリアの目的に気付いた時には、一夏はブレードを構えて相手に突進していた。

隙を見せたのも計算の内だ。

あいつは俺じゃなくて、先に一夏を落とすつもりだ。

「一夏、畏だ！ 戻れっ！！」

「遅い、ですわ」

「っ！」

笑みを浮かべたセシリア。間合いに入った一夏が距離を取ろうとしたけれど、間に合わない。スカートからもう二機のビットが外され、一夏を吹き飛ばした。爆発が白い機体を飲み込み、光を放つ。ミサイル　しかも直撃だ。

「一夏っ……！！」

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機ありましてよ！」

黒煙から、ぐらりと落ちる影が見えた。まだシールドエネルギーは残っているみたいだけど、追撃は確実にもらう。

「邪魔だあつー!!」

右手のライフルから放たれたビームが、レーザーを撃とうとしたビットの一機を吹き飛ばす。不用意に近づいてきた二機のビットも、左手で抜いたダガーで切り裂き、残りの一機を無視して一夏に近づくとこの距離じゃ間に合わない!

「お別れですわ」

銃の先に光が集まる。けれど、漂っていた黒煙を吹き飛ばしたのは、レーザーの光じゃなくて、中から現れた眩い白だった。

その光は一夏の体を包んで、その装甲を形作っていく。壊れていた装甲部分も修復され、曲線は鎧の白を一層引き立てて見せた。でも、その騎士の外見とは裏腹に、手にしていたのは東洋の太刀に似た武装。

「ようやく、終わったのかよ」

「ま、まさか……一次移行!? 初期設定だけの機体でここまで戦っていたって言うの!？」

安堵のため息がもれた俺とは対照的に、セシリアはうるたえていた。

純白の機体『白式』は、ようやくその本当の姿を見せた。これから、俺達の反撃だ。

で、その一夏と言えば……アレ? 俺達を無視してぶつぶつ何か言

ってるぞ。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ……俺だって、守ってみせる」  
「……一夏？」

「あなた、何を　ああ、もう面倒ですわ！」

セシリアの機体からミサイル搭載のビットが発射された。右手の刀で一夏はそれを切り捨て、一気にセシリアの懐に潜り込む。

「おおおっ！」

その刀身が光をまとって、鋭い一撃が　当たる前に、ブザーの音がアリーナに鳴り響いた。

『織斑一夏、失格　』

「あれ……？」

「はぁ……？」

え？　今、一夏の一撃が入るところじゃ……？　何でだ？  
ぼかんとしたまま、その場にいる三人で目を合わせる。俺を含めて、誰一人状況が分かっていない。　当の本人も、頭の上に？マークが浮かんでいた。

『織斑、何をしている。お前は失格だ。早く戻って来い馬鹿者』

織斑先生が、一夏を呼び戻す。俺と一夏は一旦高度を下げて、向かい合った。とにかく、一夏は失格……なのか？

「なあ、一夏。いったいどうして失格になったんだ？」

「俺にもなんだか……とりあえず戻らないと、千冬姉にどやされる」  
「悪い……守ってやるって、言ったのに」

「俺のほうこそ、啖呵切つといてこれじゃあな……シン、勝つてくれよ」

「ああ……任せてくれ」

そつだ。試合はまだ続いている。一夏に託された分、しっかり勝つてみせないと。

ピットに戻る一夏を見届けた後、空中で呆けているセシリアに向き直った。

「セシリア！ 決着をつけるぞ！！」

「っ！ そつでしたわね！！」

残った一機のピットが接近してきた。動きはもう見切っている。バルカンで誘導したところを、ビームライフルで打ち抜いた。爆風が軽く機体を震わせる。

「なっ……！？」

ブルー・ティアーズは全機落ちた。武器のエネルギーも十分。今なら、アレが使える。

イグナイトッドの武装画面を開き、装備メニューを選択する。

### シルエット選択

呼び出しに応じて、胴体や肩部を染め上げていた青が、炎のような赤に変わっていく。

腰にライフルをマウントして、盾の装甲を取り回しやすいように元に戻す。

背中に追加されるスラスター。それに繋がれた、一対のブーメランと大剣。

それは、相手を両断する絶大な力。

ソードシルエット・展開完了

全長を軽く超える大剣を両手に取り、連結させる。高々と頭上に上げ、振り回し、相手に構えなおしたところでビームの刃が現れた。今の今まで温存しておいた、切り札。イグナイテッドの換装装備『ソードシルエット』。インパルスに酷似したその装備は、陽の光を浴びて赤い姿をより強く輝かせる。

「まさか……戦闘中のパッケージ換装！？ そんなことが!？」

「行くぞっ!」

スラスターを全開にして、ライフルを構えるセシリアに向かって飛び上がる。照準を合わせる暇も与えないで、一気に飛び込みながら大剣を力任せに振り上げた。

「でやああああっ!!」

「っ!?!」

反射的に盾にされたスターライトmk?を真つ二つにして、胴体に強烈な斬撃。ビームの刃は装甲をたやすく吹き飛ばして、相手の体に食い込んでいく。残っていたシールドエネルギーをあっという間に削り取り、最後に剣を振りぬいて弾き飛ばしたところで、セシリアのエネルギーは底を突いた。

ブザーの音が決闘の勝利を告げる。俺達の勝ちだ。

『勝者 アスカ・織斑ペア』

「やったぞ、一夏!」

「シン、すごいな今の! そんな装備あつたのかよ!」

「へへっ、反撃用に取りつておいたんだ」

ピットに戻つて、出迎えた一夏と笑いあう。これで小間使い、奴隷は回避できたわけだ。

「試合が終つたのだから、さっさと出て行くぞ。いいな」

「了解、であります」

「敬礼は……まあ、今は良いだろう」

おどけて見せた俺達の敬礼を認めてくれた織斑先生。意外に優しいところもあるんだな……なんて甘い考えを、次の一言が容赦なく蹴り飛ばす。

「忘れていたが……これがIS起動のルールブックだ。補講の課題として、明日までに覚えるように」

どさりと落とされた二冊の本は、そりやもう辞書みたいな分厚さで……これを明日まで? やっぱり鬼だ、この人……

「何にせよ今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

あんた休ませる気なんてないだろう! と突っ込みたいのをぐつと飲み込んで、二人でそのルールブックを手にする。重い、ページはペラペラ、字は細かい……

「……シン、帰るか」

「……そうだな」

勝利の喜びも、明日の憂鬱に簡単にかき消された。寮に帰る足取りと、ついでに脇に抱えたルールブックと、おまけに気持ちも重くて仕方なかった。

「情けない……それぐらい、覚えてみせろ」

篠ノ之の無茶な要求にも、何も反論する気力がない。部屋に戻って、また即行でベットにダイブしよう。勝ったから良しとしよう……そう思っ、そのまま寝ることにしてしまった。

俺も、一夏も、その時には全く気がついていなかった。

勝っても問題は残っていることに。俺達二人は、まだ敵同士だといふことだ。

でも、俺達は笑って手を振って、自分の部屋に帰っていった。

「……………」  
「……………」

次の日の教室、朝のホームルーム中。俺と一夏はお互いに机の上で手を合わせ、硬く目を閉じていた。無言、無言。相手を思いやる一言なんてありえるはずもなく、逆に、自分が助かれば良いという自己保身の思いが頭の中を駆け巡る。

「織斑くん……織斑くん……アスカくん……」

教卓には投票箱があつて、その中から取り出された用紙に書かれた名前を、山田先生が読み上げる。今ので、イーブン。互角だ。そ

して次が最後の一票……これが明暗を分ける。

「織斑くんっ！」

「やっつっつっ！ たああっつっ！」

「ぐっ……ちくしよっつ……」

ガタンと机を揺らし、俺は渾身のガッツポーズを取った。同時に一夏がゴンッと机に頭をぶつける。撃沈、確認。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

「一夏、俺の分までがんばれよっ！」

そう、今行われていたのはクラス代表の選挙。クラスの投票の結果……僅差で俺は負けることができた。試合に負けたけど勝負には勝った気がする。ていうか、勝負に勝てればどうでも良いや、この場合。おかげで一夏がクラス代表だ。公明正大、まさに文句なしの結果

「異義ありっ！ 昨日の試合、勝ったのはシンだろっ！？ シンが代表の方が筋が通るんじゃないですかっ！？」

異論が出た。当然、一夏の口から。

「勝ったのは『俺達』だろ。だから、今の投票で二人の内で結果を決めたんじゃないか。見苦しいぞ一夏っ！」

「ぐぐぐっ……そうだ、セシリア！ お前は納得いかないだろっ！？」

突然名前を呼ばれたセシリアは一瞬驚いたようだけど、コホンと

咳払いした後、立ち上がって高らかに宣言した。

「昨日の試合……私が負けたのは“一夏さん”と“シンさん”のペアです。ですから、私は今回の投票に参加していませんし、どちらが代表になっても異論はありませんわ」

うん、セシリアは良く分かってくれていた。これならもう反論の余地はない。

「投票の結果じゃ仕方ないよね〜」

「私はちよつと残念だけど……でも、織斑くんでも面白そうだから  
いっか！」

「そんな……」

クラスの総意がまとまった。ちよつとだけ一夏が気の毒になって、  
少しだけフォローを入れることにする。

「まあまあ、俺も一緒に訓練するからさ。二人でがんばろうな？」

「はあ……分かったよ」

「わ、わたくしもクラスの仲間としてIS操縦の指導をして差し上げますわ！ それなら一夏さんもみるみる上達を」

「待て、一夏の教官は私が頼まれたぞ」

セシリアに篠ノ之が立ち上がり、お互いににらみ合いを始める。  
別にみんなで訓練すればいいじゃないか……なんで喧嘩するんだ？

「座れ、馬鹿ども」

織斑先生の出席簿が華麗に炸裂する。二人とも、しゅしゅと座り  
なおした。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいとクラスのみんなが声をそろえた。まだ苦い顔をしている一夏を除いて。

もちろん俺も返事した。異存、ないからな。

とにかく、これで一件落着だ。明日からはもう少しだけ楽な日常になるだろう。一夏は、大変だろうけどさ。

第二話『本当の決闘は明日!』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて気化してしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第三話『今日も、明日も、明後日も』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・設定がいい加減です。ご指摘はバンバンしてください。
- ・展開早いです。すみません。
- ・はつきり言って、妄想の産物です。気に入らなかったらすみませ  
ん。

### 第三話『今日も、明日も、明後日も』

四月も下旬になった。過ごしやすい気候は変わらず、授業の間も居眠りしてしまうぐらいで……俺は何度も織斑先生に頭を叩かれていた。でも、この授業はちょっととした実技訓練。退屈な座学から開放されるということで、俺も一夏も喜んでいた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。アスカ、織斑。試しに飛んでみせろ」

言われて前に出た俺達は、それぞれ自分のISを展開させる。展開をイメージする時はいつも、待機状態の貝殻を握りしめる。意識を集中　　と言うより、こつすると頭の中を勝手にイメージが湧いてくるからだ。

行くぞ、イグナイトッド

すぐに全身から光があふれ出し、灰色の装甲が現れる。それも青と白を基調とした色で染め上げられて、もう一度だけ輝きを見せる。俺のIS『イグナイトッド』。第二世代ISとして開発されながらも、誰にも操縦できなかった欠陥機。特徴として様々な換装装備『シルエット』を備え、特殊装甲『フェイズ・シフト』が実体弾・実刀のダメージを無効化する。そして、初めてこの世界にやって来た時から、俺と共にある『力』。

宇宙に上がったように体は浮き上がり、センサーに接続された視覚は世界の全てを彩ってみせる。展開時間は、研究所で訓練を始めた時よりずっと短くなった。うん、快調だ。

「よし、飛べ」

二人でうなずきあって、空に向かって急上昇する。急上昇、急下降は『角錐を展開させる』イメージですらしいけど……そんなのより、インパルスのコクピットで見た景色を思い返して動くほうがよっぽど楽だった。

「一夏、どうだ？ 空を飛ぶのには慣れたか？」

「全然だな。そもそも何で空に浮かんでられるんだ、これ」

もつともな意見。正直、俺だつて良く分からない。

「理屈は後回しで良いんじゃないか？ 動かせなきゃ意味ないんだし」

「ま、そうだな……っと、セシリアが来たぞ」

眼下のクラスメイトの中から、一人青い装甲をまとったセシリアが飛んできた。流石に速い速い。代表候補つてやつはかなり優秀だった。

「それについては反重力力翼と流動波干渉の話になりますわよ？」

「いや、それはまたの機会に」

「おう、説明してくれなくていい」

下で俺達の話聞いていたらしい。そんな話はうんざりだ、といった顔をする俺達を見て、セシリアは笑っていた。

決闘が終わった後、俺と一夏はしっかりと謝罪。セシリアも、自分にも非があつたとして同じように謝ってくれた。人間、素直に謝るのが一番良いらしい。それからセシリアは、俺達二人の訓練に合流して色々と教えてくれるようになった。特にISに慣れていない一夏の訓練をよく見てくれていて、俺としては大助かりだ。

俺だつて、人に教えられるほどの知識はないし……なんとなく空を飛ぶ感覚を伝えられる程度だ。まあ、篠ノ之の『ずどつ、がつ、ぎゅん』よりはマシだと自負している。分かるわけないだろ、あんなので……ツツコミを入れたら怒られたけど。理不尽だ。

「そのの三人、急降下と完全停止をやつて見せる。目標は地表から十センチだ」

「うげっ……完全停止かよ……」

苦手な技術の要求がされた。背中地面を削り取つたあの衝撃が思い出される。

「あら、シンさん。空戦用のパッケージもあるのじゃなくて？ そちらに換装すれば、これくらい訳もないのでは？」

「そうだよなあ。それに、空を飛ぶのは俺よりよっぽど上手じゃないか」

「実はさ、その、問題が……」

そう。はつきり言つてとんでもない大問題。課題と言つてもいいんだけど。

俺のイグナイトッドの問題点。MSとISの操縦の違い。この二つが非常に重大な課題だった。

「ほら、セシリアも行ったことだし、俺達も行くつぜ？」

「う、うん……そうだな……」

先に下りていき、完全停止までこなしセシリアを見下ろして、二人で息を合わせて急降下を開始する。集中して地面を見つめ、それがすぐに眼前に迫つて

「うわあっ!!」

「おわあっ!!」

俺と一夏は、ものの見事に撃墜した。いや、墜落つてのが本当の言い方らしい……結局、落ちたことには変わりはないけど。しかも頭っから。嬉しくないことに、センサーは周りの笑い声を余すことなく拾ってくれた。チクシヨウ……

「馬鹿者共。誰が地面に激突しろと言った」

「……すみません」

機体を浮上させて、穴から這い出る俺達。傷どころか汚れ一つない装甲は、俺達のちっぽけなプライドを汚し、傷つけ、穴を開けていた。

イグナイトッドは確かに、装備の換装を主眼とした機体だ。追加装備も今あるだけで三機は葛城さんに作ってもらったし、まだ製造中のシルエットに、イグナイトッド自身が鋭意設計中のシルエットまである。

ところが、今の俺が使えるのはソードシルエット“だけ”だ。

何でかって？ ……イグナイトッドは、追加装備全てに『プロテクト』を掛けている。ご丁寧に、俺の操縦技術に合わせてだ。そのせいで、折角作ってもらった装備は呼び出しに応じすらしてくれない。結局、研究所での訓練でプロテクトが解除できたのはソードシルエットだけだった。これだって、『対艦刀を使えるようにするためにISを装着しながら鉄パイプを振り回す』って情けない特訓の成果だ。大変だったんだぞ……

とにかく、これが問題点のその一。『イグナイトッドの装備でさえ俺は使えない』ってこと。

だったら、それを使えるようにすれば良いんだけど……ここで障害になるのが問題点のその二。『MSではできた拳動が俺にできるわけじゃない』ってことだ。

MSを動かすのはペダルやら操縦桿やらだけど、ISを動かすのは、つまりは自分自身。いくらインパルスを動かせたって、イグナイトッドは同じようには動いてくれない。

それでも、イグナイトッドのOSが補助してくれるし、イメージとしてインパルスの拳動は思い浮かべられるから、後はそれを自分がトレースするだけだ。

そうは言っても……確かに、ナイフを振り回すとか、銃を構えるとか、生身でやったことのある動きは問題ない。だけど、『対艦刀を振り回す』とか『空中で旋回』なんていうのは、生身で体感したことなんてあるはずなくて……結構、苦労した。鉄パイプもその訓練の一環だった。

おまけに、苦労してできるようになったのは『インパルスと同じ動き』で……MSは全速力で降下した後、地表十センチで止まれやしない。要するに、MSができない拳動をマスターするにはもった苦労が必要。

空中を飛び回るために、今は地面に激突か……情けない。

「一夏、平気か……？」

「平気じゃない……主に心が」

「耐えよう……今はガマンの時だ」

この後セシリアが心配して声をかけてくれた。傷薬のように、それが酷く心にしみた。

「とまあ、思いつく限りこんなところだな。お前さんのイメージ、それから反応に機体が追従して動くように再調整する、ってところか」

「はい！ 葛城さん、ありがとうございます！」

「今度帰ってきたときには、またばっちりデータ取らせてもらおうかな」

「了解です！ それじゃ、また！」

携帯を切って、パソコンの前に再び向かう。電話中に書いたメモが、今の俺には宝の地図 いや、まさにその宝に等しいものだった。

「やってやるさ、ちくしょおーっ！」

墜落の日の夜、部屋に戻った俺はパソコンで空中での姿勢制御のシミュレートに没頭していた。イグナイテッドに接続して、プラグラムを懸命に打ち込む。武器の展開は簡単にできた。でも、そんなことより、その前に篠ノ之に言われた「情けない」の一言が心に深く刺さった。見てろよ……一夏と一緒にアイツの鼻をあかしてやる！

「対機体重量比反重力制御修正、対地センサー反応レベル0.92変更、スラスタームジュールと反重力力翼間にOFCをコネクト、相互反応アダプション……確認！ 今度は神経接続のフィードバック感度ポイント上昇、空間SOD認識の再修正……終了！ これでどうだ……？ まだ遅いぐらいかよ！？ だったらどうする……？」

パソコンの画面の中の俺は、もう何度目か分からない墜落をしていた。ブレーキが掛けられるようになったのは大きな進歩だろうけど。待っててくれ、もう地面とはサヨナラさせてやるからな。

手元にあるIS用のプログラム教本を片手に、出来る限りの変更を加えていく。

なんとたつて葛城さんにアドバイスをしてもらったんだ。いくら俺には分からなくても、あの人が教えてくれた通りにすれば上手いくはず。イグナイテッドも、自動的に俺に合わせようと最適化<sup>フィッティング</sup>してくれてるんだ。俺だって……

「こうなったらこっちだ！ 装甲間神経リンクージ強化、空間ポジショニングの再調整、それからアラートの感度上方修正、S E I リアクトに対応……いけるぞ！」

グラフィックで作り上げられた機体は、地面に激突する前にピタリと止まった。成功だ！

「ようやく出来た！ くうう~~~~っ!!」

苦勞した甲斐があったというもの。イスをくるくる回して、両手をあげる俺。きつと誰かに見られていても気にとめなかっただろう。さて、後はシミュレーション通りに動けばいいんだけど、試すのは明日にならないと。アリーナ開いてないし。

「あ、そう言えば」

時計をちらりと見やると、自由時間を少し過ぎたところだった。今日は寮の食堂で『織斑一夏クラス代表就任パーティー』なんてものをやるらしい。今頃、一夏は渋い顔をしてることだろう。クラス

全員参加が基本だから、俺も行かないとな。

「就任祝い、だな。コレは」

さつきまで使っていた『葛城さんメモ』を手に取る。俺みたいな基本の基の字も知らないような奴でも、教本と照らし合わせれば調整できるようなことらしい。きつと一夏にも役立つだろう。流石は主任研究員の葛城さんだ。頭が上がらないよ、本当に。

「ゴメン、遅くなった……って、なんか人数多くないか？」

「あ、アスカくん。きたきた、待ってたよ」

「ささ、こつちこつち」

食堂の中は明らかに一組の人数を超える人が集まっていた。一夏は真ん中の方で、何やら見知らぬ人に、ボイスレコーダーを突きつけられてうるたえている。クラスメイトに案内されて近づけば、その矛先は俺に向かってしまった。

「シン！ 交代だ、よろしく！」

「お、君が噂のもう一人、第一学年『最強』の男！ シン・アスカくんだね！ 私は新聞部副部長二年の黛薰子。よろしくね」

目をキラキラさせながら名詞を渡された。ていうか、そんな噂なんて知らないぞ、俺。

「え、有名だよ？ 入試主席のセシリアちゃんを倒した、期待の専用機持ちだつて」

「勝ったのは俺と一夏。二人で勝ったんだから、そんなわけじゃ…

「……」  
「あ、いいよいいよ。コメントは適当にでっちあげるから」

「……こういうのが噂の先行の真実か。情報は武器になる。そしてその武器は俺達に牙を剥く……でも、個人の力はあまりに無力だ。セシリアのインタビューに行った黛さんは放っておいて、一夏に『葛城さんメモ』を渡すことにした。」

「ほら、クラス代表就任祝い。がんばれよ」

「……？ なんだ、コレ？」

「IS用OS調整のコツとポイント。さっき俺もプログラムし終えたから、一夏も使えよ。効果は保証するぞ？ 研究者に聞いたんだからな」

「シン……お前って奴は……」

笑いながら返して手を差し伸べると、一夏も強くその手を握り返した。ガシツと握手をする俺達。男の友情なんて単純なものだ、なんてルナに馬鹿にされそうな場面だな。うん、でも、シャッター切られてるんだから、新聞部としてもおいしい場面でもあるんじゃないか？

「うわ、やっぱりこっちも噂通りなんだ！ スクープだね！！」

「……あの、それってどういう噂なんですか？」

「こっちも、ってどういうことですか？ なんだか凄い嫌な予感が

……

「アスカくんは男色家で織斑くんに気があるって聞いたんだけど？」

吹き出した。盛大に吹き出した。周りの女子達は『やっぱり』と

か『どつりで』とか口々に言っている。どつからそんな噂が立ったんだよ!？」

「ちよつと待てよ! どうしてそんな話になつてゐるんだ!？」

「だつて、よく織斑くんと一緒にいるし。様々なアプローチで織斑くんに迫つてゐるって」

迫つてない。普通にクラスの仲間として付き合つてゐるだけだ。

「で、織斑くんも満更じゃないって」

「んなわけねーだろっ!！」

一夏も大声を張り上げた。でもさ、当事者の否定の言葉って、大抵は無視されるんだよな。主に勘違いしがちというか、暴走しがちな面子に。

「シンさん……まさか、男の方に興味がおありとは思いませんでしたわ……」

「誤解だ! すっごい誤解だ! 別にそんなことはないぞ!！」

「一夏、私が見ないうちにそんな趣味に走るとは……不潔だ! 恥を知れ!！」

「第! 今の否定の言葉が聞こえなかったのかよ!？ 止める!! 木刀をしまえ!！」

ぎゃあぎゃああと騒いでいるうちにまた写真を撮られた。いつの間にか一組メンバーが全員集合して。見出し記事にはさぞ似合う写真になつてゐることだろうな。そんな集合写真、俺いらぬ。

結局、『織斑一夏クラス代表就任パーティ』が終了したのは十時過ぎだった。疲れきつて部屋に戻る俺達とは対照的に、クラスの皆

は元気いっぱい。篠ノ之は最後まで冷たい視線を俺に向けていた。やめてくれ、そんな目で俺を見ないでくれ。

次の日の朝には、教室の話題は俺の男色家疑惑から転校生の話題にシフトしていた。良かった……女子は飽きるのも早いらしい。さつさと忘れてくれ。

「アスカくん、織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？  
なんでも中国の代表候補生なんだって」

「転校生？今の時期に？」

「しかも代表候補生か。へー」

ずいぶん急な話だな。まあ、妙な噂がそれで消えてくれるならありがたい。見知らぬ転校生が、俺には救世主に思えてくる。

「そんなことより！一夏さん、クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう！」

「そうだ、今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？」

「あら、篠ノ之さん。一夏さんの訓練はわたくしがお手伝いしますから、あなたの出番はありませんよ？」

「ふん！一夏が最初に訓練を頼んだのは私だ！」

セシリアと篠ノ之が登場。最近二人とも妙な対抗意識を燃やしていて、事あるごとに突っかかっている。原因はなんだ？仲良くしたほうが良いのは当たり前なのに。その当たり前前なのが、なかなか分かんないんだけどさ。

「一夏、模擬戦なら俺も相手するけど？」

「そうだな。シン、頼めるか？」

「任せておけって」

「サンキュ」

「はっ！？ おいアスカ！！」

「抜け駆けはいけませんわ！！」

抜け駆けってなんだよ、抜け駆けって。頼むから仲良くしてくれよ。

クラス代表同士のリーグマッチ、クラス対抗戦。一夏に面倒ごとを押し付けた分は、しっかりサポートしないと。優勝商品なんてものもあるから、クラスの女子もそれなりのプレッシャーをかけてるし。ちなみに、その優勝商品は学食デザートの半年フリーパス。うーん、あんまり嬉しくない……

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパス楽しみにしてるからね！」

「専用気持ちのクラス代表は一組と四組だけだから余裕だね！」

わらわらと机に集まってくるクラスメイト。俺も一夏もすっかり慣れてしまったのが驚きだ。

「その情報、古いよ」

教室の入り口にもたれかかっていた女子の声が、クラスの喧騒に割って入った。黒い髪をツインテールに結んでいて、小柄な体の腰まで垂れ下がっている。知らない顔だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音<sup>ファン・リンイン</sup>。今日は宣戦布告に来たってわけ」

また一夏の知り合いらしい。代表候補生って名乗ったから……あいつが俺の救世主様なわけだ。だったら早速、お礼に良いこと教えてやらないと。

「おい、アンタ。早くどいたほうが良いぞ？」  
「何よアンタ、邪魔しな」

言い切る前に、頭にバシッと出席簿が叩きつけられる。織斑先生が来てるのに気付いてなかったみたいだ。あーあ、だからどいたほうが良いって言ったのに。

痛々しいことに、頭を抑えて涙目になりながら、一夏を指差してなにやら吠えていた。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

バタバタと勢いよく走り去っていく音が、教室から遠ざかっていく。

次いで、一夏を囲んでいた女子の頭を出席簿が乱撃。この速さと正確さはすさまじかった。

昼休みになって、俺達は学食へ疲れた頭と空腹を癒しに向かっていた。あんまり癒しが過ぎると、午後の授業には居眠りをしてしまうのが玉にキズだ。

今日のメニューは……ラーメンだな。中国代表とか聞いているうちにふと食べたくなつた。食券を買っていそいそと列に並ぼうと

「待ってたわよ、一夏！」

お盆の上にラーメンどんぶりを乗つけた女子に進行をふさがれた。転校生の鳳フタエンとかいう奴、律儀に一夏のことを待ってたみたいだ。なら食券だけ買って待ってれば良かったのに。ラーメンのびると思うんだけど。

「ほら、食券出せないからどいてくれ。あと、のびるぞ」

「わ、わかつてるわよ！ 大体、アンタを待ってたんでしようが！  
なんで早く来ないのよ！」

むしろラーメン手にして待ってるほうが不思議なわけで。けど、一夏もコイツも、お互いに口調がとても親しげだ。多分付き合いはそこそこ長いんだろうけど……なんでだろう、二人の様子見をするセシリアと篠ノ之から『いかにも不機嫌です』といった雰囲気伝わってくる。午前中に織斑先生の出席簿クラッシュを食らったせいかな？

「篠ノ之、あいつはお前とも知り合いじゃないのか？ 一夏とは小  
学生からの知り合いなんだろう？」

「知らん！ あんな奴のことは知らないし、一夏から聞いたこともない！」

「そっか。あ、テーブル空いたから行こうぜ」

食事を取るときはだいたい十人前後のグループが出来上がるから、テーブルを見つけるのも時間がかかることが多い。あっさり席が空いたのは、ラーメンを食べるのには都合が良かった。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ」

食事中も、一夏と鳳<sup>フアン</sup>はお互いに質問タイム。話はずんでるようだから、口をはさむのも気が引けるし、黙って見てよっと。俺だつてそれぐらいの気遣いはできるさ。それに、俺が聞かなくても……

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！ 一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってるの……やるの！？」

ほら、俺の代わりに質問してくれる奴らがいた。でもさ、二人とも、少しは気を遣ってやっても良いんじゃないか？ ご機嫌斜めだから、言わないけど。

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」

「そうだぞ、ただの幼なじみだよ。ん？ 何睨んでるんだ？」

「幼なじみ……？」

「あー、えつとだな。幕が引越していったのが小四の終わりだっただろ？ 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会つのは一年ちよつとぶりだな」

分かりやすい説明ありがとう一夏。だから篠ノ之<sup>フアン</sup>は鳳のこと知らなかったんだ。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

全然よろしくねって感じじゃないぞ。明らかに険悪なオーラが出てて、一夏も引き気味だ。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れてしまっただけは困りますわ。わたくし、イギリス代表候補生のセシリア」

「ごめん、あたしはアンタのこと知らないし、他の国に興味無いから」

「な、な、なっ……！？」

セシリアが顔を真っ赤にしてこぶしを震わせていた。確かに、これは失礼かもな。昔の俺なら食ってかかるところだ。もうそんなことしないけど。

で、怒ってるセシリアのことを無視して、一夏との話を再開する。<sup>ファン</sup>鳳の腰を折ったのはセシリアと篠ノ之だから、仕方ないか。積もる話つてのがあるんだろ、きっと。

「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

気持ち顔が赤い。視線だけを一夏に向けて、ぼそぼそと鳳が言った。へー、面倒見の良いところもあるんじゃないか。

「あー、IS操縦の方はシンに頼むから、鈴はいいよ。手間だろ？  
ありがとな」

何かが割れる音が聞こえた。ピシッっていった。ついでに言えば、セシリアをかんかんにさせた時も、全く同じ音が聞こえた。つまり、

第一級の危険信号。どうしてだ？ 一夏、何かマズイことでも言ったか？

「ねえ、一夏……そのシンって奴は誰……？」

「俺のクラスメイトだよ。ああ、ほら。そこでどんぶり傾けてるぞ。」

こつちを指した一夏の箸に、空いた右手で敬礼を返す。早いところスープを飲み干したほうが良い。きつとこの後、また面倒ごとが起きる。

空になったどんぶりをお盆の上に置いた途端、バンツとテーブルが叩かれて食器が浮いた。

「アンタ、朝からなんなのよ！？ 一夏とどういう関係なの！？

そもそも、なんで一夏以外に男がいるの！？ 答えなさいよ！！」

「あのさ、ここ食堂だから、あんまり大声出さないほうが……」

鳳フアンの口からは火が出そうな勢いだった。なんとかなだめすかそうと両手で静止のポーズを取る俺の背後に、腕を組んだセシリアと篠ノ之が急速に回り込む。

「フン、アスカは一年一組所属。一夏とはクラスメイトというわけだ。しかしだな……コイツはそれだけではない」

「そう……シンさんは学年でも『最強』を謳われる男子。なんと言つても一夏さんと共に、入試主席のわたくしさえも打ち破ったのですから！！」

「そして！ 一夏はアスカに教えを請い！ さらにアスカは、私達に『どうしても』協力を要請している！！ つまりだな！！」

「ええ！ 一組代表である一夏さんの訓練！ 担当はわたくし達だけなのですわ！！ あなたの入り込む余地など微塵もなくてよ！！」

バックではメラメラと炎が燃え上がり、握りこぶしを作って力説する二人。交互にセリフを読み上げて、息ぴったり。仲直りしたのか？ 仲の良いのはホントに良いことだ。

けどさ……俺、『どうしても訓練手伝ってくれ』なんて言ったっけ？ それにさ、大声出しちゃダメだって。一夏含めて周りの皆がドン引きしてるぞ？ ついでに言わせてもらえば、そんな説明で納得してくれるわけ

「くう〜っ……！ そうね！？ コイツがあたしに、『一夏の特訓に協力してくれ』って頼めば良いのよね！？」

あ、納得してた。いや、そういうわけじゃ、ないんだけど……

「アンタ！ 操縦訓練の手伝い頼みなさいよ！！ さっさとする！！」

「え、あ、いや……」

「アスカ！ そんな頼みを聞く必要などない！」

「そうですわ！ シンさん！」

最悪な板ばさみになってしまった。どう返事しても、俺が睨まれるんじゃないか……

ねえ、ステラ。俺、何か悪いことしてたっけ？ こんな目に会うよいうなこと、したっけ？ 一夏にクラス代表押し付けたのがいけなかったのかな？

助けを求める視線を一夏に送れば……首を横に振った。諦める、のサインだ。嘘だろ……

「えっと、アンタどうして一夏の訓練に付き合ってくれるんだ？ 宣戦布告とかまでしたくせに、おかしくないか？」

「そ、それは……その……」

顔を真っ赤にして、ごによごによと聞き取れないことを呟く鳳。<sup>ファン</sup>  
しめた。なんだか分からないけどひるんだぞ！ チャンスだ！！

「訓練の手伝いはありがたいけど、対抗戦が終るまでは待つてくれ。もちろん、アンタが一夏の情報を盗もうって考えてるとは、思っちゃいないけど……やるからにはフェアじゃないと。俺も一夏もやるからには本気だから、そんな敵に塩を送ってもらうような真似はできない」

実は、ほとんど嘘だった。敵の情報を得て対策をとるのは、戦闘の基本だ。だからレイと一緒に戦闘シミュレーションを繰り返したし、実際に効果もあった。

つまり、今のは口からでまかせ。スポーツで足を引っ張るのは、また別の話だけど。卑怯なのは間違いない。

「くっ……仕方ないわね、分かったわよ」

ようやく刀を納めてくれたようだ。助かった……

「じゃあ、訓練の後に行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」  
「あつ！ おい、鈴！」

訓練後に一夏と会う約束だけ勝手に取り付けて、鳳<sup>ファン</sup>は去っていった。話題をかつさらってくれた救世主の転校生は、代わりにまた一つ頭の痛い課題を残していった。

「一夏、特訓が優先だぞ。私が見てやるんだからな」

「あら、篠ノ之さんの出番はなくてよ？」

「何!？」

「なんですの!？」

いなくなったたらまたセシリアと篠ノ之は喧嘩を始めるし……何な  
んだよ、全く……

「お前の知り合いつて、あんなのばっかりなのか……？」

「わりい……返す言葉がねえや」

「いや……大変だな、一夏」

お互いの肩に手を置いた。同じような苦労を重ねて、俺達の友情  
は日増しに強くなっていく。今日も、明日も、明後日も……やっぱ  
りそんなの嫌だ。こんな苦労はもうしたくないよ、俺。

ちなみに、午後の授業はこの疲れがたたって三回ほど意識が飛び、  
きっちり同じ分だけ織斑先生の出席簿に叩き起こされた。意識が違  
うところに飛びそうな勢いで。

補修の時間には、山田先生に「アスカくんって、男の子に興味が  
あるって……ホントですか？」って聞かれた。リングを赤いペンキ  
に突っ込んだような真っ赤な顔で。

訓練の時間には、何故かアリーナで二対二の模擬戦になった。セ  
シリアと篠ノ之がしつこく一夏を狙うから、かばうのに必死だった。

部屋に戻ったところで、その日の記憶は無くなった。

第三話『今日も、明日も、明後日も』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてのびてしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

#### 第四話『明日を乱すもの』（前書き）

以下のことにご注意ください。

- ・期間が開いたというレベルじゃないので、整合性がとれているか分かりません。
- ・お叱りの言葉は遠慮なく……というかも罵ってください。
- ・というか、すみませんでした。
- ・申し訳……ありませんでした。

## 第四話『明日を乱すもの』

地球だから重力があるのは勿論だけど、それ以外に四季があるってことが日本の良い所だ。オーブも島国で、四季があつて、春が新生活の季節だった。家族で花見に行くことも楽しみで、秋には同じ場所でバーベキューをしたりして、同じようにマユと駆け回るのが大好きだった。

今の俺も、あの時のように季節の変化を感じていられる。

葉の緑も濃くなって、すっかり五月といった様子になった。

転校生の凰フアンが来てから早くも数週間。クラス代表対抗戦を翌週に控えて、今日も今日とて俺達は訓練の毎日だった。

ISを着けていない状態での剣術訓練、それからセシリアに操縦技術の指導をしてもらい、最後に俺との模擬戦をする。我らがクラス代表、織斑一夏の特訓は順当に進んでいた。もちろん、俺の方だって順調に訓練を重ねていた。課題だった空中での姿勢制御その他もろもろはクリアー。実際に動かすのはまだんだけど、ようやく“アレ”が使えるようになったわけで……はあ、長かったな。

「来週からいよいよクラス対抗戦だ。アリーナの調整があるから、今日で特訓は最後だな」

放課後の夕日をバックに、第三アリーナに向かって俺達は歩いていった。

篠ノ之の言葉通り、準備期間中にアリーナの使用はできない。自分の訓練もそうだけど、一夏の特訓ができないのは残念だ。まだやることはいくらでもあるのに。

「IS操縦も様になってきたな。今度こそ」

「わたくしとシンさんが特訓を担当しているんですから、これくらいは当然ですわね」

「ふん。アスカとの模擬戦はともかくとして、射撃装備の無い一夏のISに中距離射撃型の戦闘法が何の役に立ったというんだ」

睨み合いの開始。篠ノ之とセシリア、二人が揃うといつもいつもこれだ。もういい加減になだめるのも飽きたので、放っておくことにする。

「一夏、今日は最終調整だな。模擬戦の内容、確認しとくぞ？」

「おお、よろしく頼むぜ」

「今日は俺が中距離からライフルで狙撃するから、お前はそれを避けて接近、攻撃。接近戦に持ち込まないと、ジリ貧になるからな」

模擬戦なのに、この条件指定をしたのには理由がある。一夏のISには近接戦闘用のブレードしか装備がない。初期設定の装備は変更できないらしいし、後付装備の余裕も無いという極端な機体が、一夏の『白式』だった。織斑先生のアドバイスもあり、訓練は基礎の移動技術と近接戦闘に絞ってある。特に実戦形式で、習うより慣れるという側面が強い。

「分かってるって。今日こそ一撃」

「二人とも、聞いているのか（いますの）!？」

「はいはい、聞いてるよ」

睨み合いの次には、いがみ合い。俺達は軽くいなして、第三アリアナのドアを開けた。

「待ってたわよ、一夏!」

「鳳？ アンタどうしたんだ？」

「今日はアンタに用はないの！ どいたどいた！」

「はいはい、分かりましたよ」

腕組みをして、仁王立ちをしていたのは鳳だった。その姿を認め  
た途端、さつきまで喧嘩していたはずのセシリアと篠ノ之の敵意が  
方向転換する。こういう時だけは仲良くなるんだよな、こいつら。

「貴様、どうやってここに」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あのさ、話が進まないから二人とも落ち着いてくれ」

この二人が絡むと確実に話がこじれるから、その場で待ったをか  
けることにする。証拠は食堂での一件だ。そして、被害を受けるの  
も多分、俺が一夏だ。

「一夏、反省した？」

「へ？ なにが？」

「だ、か、らっ！ あたしを怒らせて申し訳なかったなーとかある  
でしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

そうそう。理由は知らないけど、一夏と鳳は喧嘩をしまして、  
仲直りもしていないらしい。喧嘩の原因が分かれば、まだなんとか  
なりそうなんだけど……一夏に聞いたら『毎日酢豚をおごってくれ  
るっていう約束を覚えていたのに、なんでか知らんけど怒られた』  
そうだ。うん、何を言ってるのか分かんないや。

そんなわけで何度か、鳳が俺に一夏の様子を聞きに来ることがあ  
った。気になるなら意地張ってないで本人に言えばいいのに、なん  
て言うって決まって怒り出すものだから、俺も途中から首を突っ込む

のは止めにして、凰と雑談するばかりだった。

話してみれば凰も嫌な奴じゃなかったもので、一夏とは仲良くして  
いてほしいのが正直な所ではある。

「俺、先に中入ってるからな」

ややこしいことになる前に、さっさとアリーナの中に入ることに  
した。だんだん二人の会話が言い争いに近づいてきてる。今までの  
経験上、この後は確実に相手が怒り出すのがオチだ。心の中で念仏  
を唱えながら、アリーナのドアを開けた。

「まったく、落ち着いて、訓練させて、くれよ、と」

広いアリーナの中で準備体操。体をほぐしておかないと、ISの  
操縦は負担が大きいから、いつも念入りにすることになっていた。

一夏との模擬戦までは射撃訓練でもしておこうとか、そろそろ葛  
城さんが新しいシルエットの製造してくれてるだろうとか、とり  
とめのないことを考えていると

ドガンッ！

ピットの中から轟音が聞こえた。やっぱり……何かやらかしたん  
だな。一夏は無事か？

ピットに駆け戻ると凰の姿はもうなくて、壁には直径三十センチ  
ほどの丸いへこみができていた。確かここの壁、特殊合金製でめっ  
たなことじゃ傷つかないって話だ。こんな傷がつけられるのはIS  
だけだろう。

「セシリア、これ……」

「凰さんのISですね。一夏さんと同じ近接型、しかもパワータイ

「プですわね……」  
「情報通り、だな」

風のISは近接格闘型。接近戦を挑んでくれれば、一夏も対応しやすい。勝ち目の薄い射撃戦を展開されるよりかはマシだ。時間が惜しい。早く訓練しないと。

「一夏、早くアリーナに……って、どうした？」  
「いや、ちよつとな……失言しちまって……」

一夏は猛烈に後悔した顔で、ため息をついていた。けど、今はそんなことをしている場合じゃない。

「後悔するのは後回しにするぞ。明日の試合、勝つんだろ」  
「……ああ」

「剣術の動きの確認、それから一通りの操縦の復習をしたら、すぐに俺との模擬戦に入ろう。」

明日の一夏の試合、相手は凰だ。一夏のためにも、ここで負けさせるわけにはいかない。振り向いてみれば、一夏の目にはしっかりとした意志の光が戻っていた。

そして試合の日。俺達は会場ではなくて、アリーナのピット内で観戦することになっていた。メンバーは織斑先生に、山田先生、セシリア、篠ノ之に俺の、代表関係者。観客席の方は超満員で、リアルタイムモニターで観戦する生徒も多いらしい。超満員の理由は、物珍しい男子生徒の試合だから。俺が出ることにならなくて良かったと思ってしまうのは、薄情なのだろうか。

アリーナの中では既に、一夏と凰が試合開始のブザーを待っている。ここまで来るともつでできることが無いのが歯がゆい。けど、一夏も俺達もやれるだけのことはやった。

(だから勝てよ、一夏)

心の中で呟いたその時、ブザーが鳴って二人が刀を交えた。

凰の第三世代型IS『甲龍』。巨大な双刃が一夏を立て続けに襲う。それでも、一夏も負けずに剣で連撃を捌ききる。ここまでは訓練の成果ありだ。問題なのは『甲龍』の特殊装備

『甘いわよっ!』

『ぐあっ!』

刃を受け止めていたはずの一夏の体が大きく吹き飛んだ。「衝撃砲《龍咆》」は、目に見えない砲弾だ。空間に加えられた圧力が砲身を作り出して、そこから衝撃自体が弾丸になって撃ち出される。しかも全方位死角無しのおまけ付だ。まったく、ISの装備は良く分からないものが多い。

「剣で互角でも、固定装備の差がかなり出てくるな……」

「ええ。早く勝負を決めないと、それだけ一夏さんの不利につながりますわ」

近接ブレード一本で戦うには厳しい相手だ。だからって、一夏も手をこまねいていたわけじゃない。

《雪片式型》の特殊能力は、自分のシールドエネルギーを消費して相手のバリアーを無効化する。攻撃特化の能力過ぎて両刃の剣だけでなく、威力は計り知れない。これを相手に当てるためには奇襲に限る

ということ、そのための技術『イグニッション・ブースト 瞬時加速』の習得までこぎつけた。これさえ成功すれば、勝機が見えてくるはずだ。

「篠ノ之、大丈夫だって。一夏は負けないさ」

「……しかし……」

「ほら、アイツは諦めてない。勝負に出るつもりだ」

ずっと不安そうな顔をしていた篠ノ之が、画面をきっと見つめなおした。

一夏の目。俺に向かってきた時の、あの強い意志を秘めた目だ。何が一夏を動かすかは知らないけど、大きな思いが一夏を支えている。

一夏が刀を構え直して、加速の体勢に入った。決めるつもりだ。

『うおおおおっ！』

一夏が相手の懐に飛び込んだその時、アリーナを大きな衝撃が襲った。一夏の攻撃でも、凰の攻撃でもない。二人の装備に、巨大な爆発を起こすような装備は無かったはずだ。

パネルをタッチしてアリーナ内の画面を切り替えていくと、二人とも茫然として、アリーナの中央から上る巨大な煙を見つめている。

アリーナには外部、内部問わずに攻撃を遮断するためのシールドが張つてある。なら、それを突き破つて乱入してきた奴がいるってことだ。

「敵襲……！？ くそっ！！」

「あ、アスカくんっ！？」

頭が状況を整理する前に、弾かれたように体が動いた。競技中の乱入者なんて、どう考えても穏やかな話じゃない。ピットの入り口

のコントロールパネルに触れたけど、ブーツと赤いエラー画面が表示され、ゲートは開かなかった。パネル隣に書いてある緊急時操作をしても、ゲートはうんともすんとも言わない。完全にロックされたらしい。

「だったら、こうするまでだっ!!」

胸の貝殻に手を触れると、全身に装甲が展開されていく。クリアーになっていく視界の片隅に、所属不明ISの確認を告げる緊急画面が開いていた。さらに続いて、所属不明機がアリーナの中の二人をロックオンしていることも教えてくれる。すぐに助けに行かないと……!!

左腕に盾を展開させながら、右腕で腰のサイドスカートからダガーを引き抜く。

「アスカ! 何をしている、止める!!」

「後で説教でも嘗倉入りでも受けますよっ! 下がっててくださいっ!」

織斑先生の呼び止める声を無視して、俺はゲートを切りつけ始めた。けれど、そこらの鉄の扉とは違って、ゲートは傷こそつくものの破れる気配はない。

「先生たちが来るまで、俺達で食い止めますから」

「織斑君!? ダメですよ! 聞いてますか、二人とも!」

背後では山田先生がプライベート・チャンネルを開いている。会話は聞こえた。二人とも逃げるつもりがないらしい。その通信の内容が、一層焦りを募らせる。もし二人に何かあったら……そう思ってしまうと、がむしゃらに腕は動く。

特殊合金製だろうが、シールドが張ってあるのが、構うもんか。  
この先に大事な仲間がいるんだ。戦ってるんだ。

今度こそ守ってみせるって、決めたんだ。

「開けっ！ 開けよっ！ コイツっ！！」

「シンさん……」

「アスカ、それぐらいの攻撃ではその扉は開かん。おとなしく待っている」

「だからって！ 何もしないで待ってなんかいられませんよっ！！」

ISのハイパーセンサーを通して聞こえる織斑先生の声は、明らかに震えていて、一夏のことを心配していた。

自分が助けにいけなくて、俺と同じで、悔しいはずなのに。  
たかが壁の一つ先なのに、その壁も切り裂けない。

隣のコントロールパネルのエラー音が、むなしくピット内を響いていた。

「こうなったら、ソードシルエットで……って、篠ノ之？」

「篠ノ之さん？ 何をするんですか？」

さっきまで黙って立っていた篠ノ之が、木刀を片手にゲートのコントロールパネルに近づいて行った。

そして、木刀を高く振り上げると

「はあっ！！」

人間相手ならかなり危険だろう威力で、コントロールパネルを思い切り叩きつけた。

一撃をもらったパネルがボンツと軽い爆発を起こした途端、ゲートが重い音を立てて開き始める。

その場にいたみんなが、啞然としていた。

「アスカ、開いたぞ！ 行けっ！！」

「っ！？ そ、そうだっ！！」

振り向く篠ノ之の言葉で我に返る。

ぶつつけ本番だけど、コイツを使うときだ！

武装のセレクターからフォースシルエットを選択する。認証を終えると背中に大型スラスターが装着され、その赤く縁取られた両翼を開いた。

空いた右腕で空中からライフルを取り出して、空中にふわりと浮き上がる。

青くきらめく装甲が、ゲートから漏れる光を反射させて一層の輝きを見せた。

フォースシルエット・展開完了

「アスカくんっ！ ダメですよっ！！ 危な」

「アスカ。許可する、行ってこい」

「でしたら、わたくしもっ！！」

「セシリアは後方待機だ。あまり大人数で行っても邪魔になる」

「うっ…分かりましたわ……」

こつちを見上げるみんなに敬礼してから、スラスターにエネルギーを集めて、加速の体勢に入る。エネルギーの集約量は、イグナイテッド単体の比じゃない。

「アスカ……一夏を頼む」

「篠ノ之、ありがとう。任せろ、行ってくるっ!!」

あごを引いて、スラスタの出力を一気に引き上げる。ほんの少し前なら制御のまるで利かなかった速度でも、機体が思い通りに動く。訓練の成果、大有りだ。

視界に映る敵のターゲットサイトは、試合をしていた二人の鳳の方に固定されていた。両腕に熱源が集中するのを感じ、鳳は……いけない! アイツ、気付いてない!

「おい、鈴っ!」

「っ!? しまっ」

「させるかっ!」

間一髪のところ、鳳の前に躍り出て盾を構える。腕を伝う衝撃が消えた後、すかさずにライフルを発射する。不意打ち気味の一撃だったけど、銃口のついた長い腕がビームを弾き、素早く俺にロツクを向けた。

「二人とも無事だなっ!?!」

「シン! 来てくれたのか!?!」

「アンタ、何考えて」

鳳が言い切る前に敵が接近。振り回した腕から、ビームが何発も打ち込まれる。盾を構えながら銃で応戦してみれば、すぐに相手は攻撃の手を止めて回避を始めた。動きは非常に速い。

今まで見てきたISの数は多くはないけど、目の前の巨大な機械は、明らかに他と一線を画していた。確かに人型だけど、腕は足元まで伸びていて、全長が2メートルほどになる。全身を張り巡らさ

れた装甲、首のない頭部。まるでMAだ。

「これも、ISなのか……？」

「そんなことよりっ！ 何考えてんのよアンタっ！？」

「シン、気をつける。アイツの動き、どこか変だ」

「動き？ 見た目だけじゃなくてか？」

「あーもーっ！ 話を進めないでよっ！！」

オープン・チャンネル内に、通信が乱雑に飛び交う。通信を始めると、敵はロツクオンをかけたまま、両手をだらりと下げた。

「なんつーか……動きがまるでロボットみたいだろ？ 人の乗ってる気がしねえ」

「無人機、つてこと？ ISは人が搭乗しないと絶対に動かないわよ？」

「……ありえない話じゃないんじゃないか？」

常識なんて簡単に覆る。陽電子砲を跳ね返す兵器も、都市一つ壊滅させる兵器も、月の裏側からの戦略兵器も……想像したことない兵器なんて、いくらでも見てきた。この世界だったら、無人機ぐらいあってもおかしくない。

「だとしても……無人機なら、どうだって言うのよ？」

「人が乗ってないなら、全力で容赦なく攻撃しても大丈夫だってことだ」

そう言って、一夏が刀を強く握りしめた。一夏の攻撃はバリアーの無効化ができる。まともに食らえば、いくらISを装着していたとしても相当のダメージを負うだろう。下手をすれば、搭乗者の命に関わる。無人機相手なら、その気兼ねをしなくて済む。

「一夏、『零落白夜』はまだ撃てるか？」  
「あと一発。次は必ず当ててみせる」

肯くその表情から、覚悟の強さが伺える。それなら、俺のやることも決まっている。一夏に無事に攻撃させたやることだ。

「分かった。隙は俺が作る……けど、無茶するなよ？」

「何言ってるんだよ、自分は無茶するくせに」

「ちよ、ちよつと一夏！ コイツに任せて大丈夫なの！？」

ほんの少し笑みを浮かべてお互いを見やっていると、慌てたように鳳が間に入ってきた。俺と一夏は知り合って一月そこそこ。背中を任せる相手としては、不安に思われるかもしれない。

「鈴、シンなら絶対に大丈夫だ。実力は俺が良く知ってる」

「でも……」

「心配なら、約束するさ」

二人の少し前に出て、振り向いて、はっきりと言ってみせた。

「一夏も、それに鳳も……必ず俺が守る。約束するよ」

「……っ!？」

向き直る時に一瞬だけ、鳳の顔が赤くなってるのが見えた。ああ、無責任な発言に思われたか？ 怒ってるなら、後で謝らないと。

「ほら、鈴も手伝ってくれ。いい加減、敵さんも待ちくたびれたみたいだぜ？」

おしゃべりの時間は終わりだとも言うように、深い灰色の機体  
がその手をふり上げた。

鳳の前で突撃の構えを取る一夏。何か策が有るみたいだ。

無人機だったら全力で構わない。

一夏の口にした言葉を反芻する。今までだったら、考えられない  
話だった。

自分が相手にしてきたのは、全員……人間だった。

でも、そんなこと必死で振りほどいて、いつつも戦闘を続けてい  
た。

殺らなきゃ、殺られる。それじゃ何も守れない。そうやって言い  
聞かせて。

それで平和になるのかなんて、本当は、自分では分からなかった  
のに。

戦争はヒーローごっこじゃないって言われたこともあった。

アスランからしたら、当然の話だったんだろうな。敵だって人間  
なんだって、当然のことを忘れないでいたんだから。それで苦しむ  
のは、自分だったのに。

傷ついて、傷つけられて。それなのに、全てを守ってみせるなん  
て、それこそヒーローごっこ。このヒーローそのものだ。敵を倒して、  
みんなを守って。

誰かの明日を奪うことしか、俺にはできなかったのに。

でも、俺は諦めたくない。守りたい。

ステラと約束した、俺の明日。

どんなものになるか、今でも俺は分からない。  
けど、はっきりと分かることもある。

今この場に、守りたい人たちがいるってことだ。  
それぞれに、同じように明日があるんだ。

明日を守ってみせられるなら。今度こそ、守れるのなら。

やってやるさ。アイツを、倒して。

空に浮かんだいびつな機械が、その腕を俺に向ける。背部スラストからビームサーベルを引き抜いて、敵と対峙した。その手の砲口に熱量が高まるのも、光が収斂していくのも、今の俺には全てが見える。怯えなくていい。

守るための『力』が俺と共にあるから。

熱線が近づいた。俺をかき消そうとする光の奔流に、スラストを急加速させて飛び込んでいく。前方に掲げた盾が光を切り裂き、熱戦を押し返していく。銃撃が終わったその瞬間、盾を放る。すかさずその手の残光に向けてサーベルを突き刺した。敵は避けるまもなく、伸ばしたままの右腕で光の刃を受け止める。砲撃直後の放熱をオーバーしたのか、がくがくと右手が揺さぶれる。なんとか光を弾いていたはずの掌は、耐え切れず爆発を起こして、ビームの閃光がシールドを突破し、肘の先までを貫いていった。

「今だ、一夏あつ！ いけえっ！！」

「うおおおおっ！！」

崩れかけた姿勢を立て直し、センサーアイが音を立ててこっちを捉えなおす。左腕を離脱する俺に向け、砲撃をしようとした一瞬に、すさまじい加速で一夏が敵機に接近する。カメラが一夏をロックした瞬間には、敵の左腕は宙を舞っていた。それでも、敵はひるまない。全身のスラスタを点火して、一夏に体ごとぶつかっていき、体勢の整えられない一夏を吹き飛ばした。カメラアイを上に向け、上空に方向を転換しようとする。

「逃がすかよっ！」

敵の逃走ルートには、既に俺が回りこんでいた。手にしているのは、もう一本のビームサーベル。出力を最大まで引き上げて、大きく振りかぶる。一夏の攻撃の瞬間に、俺も準備していたことだ。逃がしはしない。

「落ちろおおっ!!！」

巨大な胴体に、サーベルを力任せに突き立てる。背部のスラスタを全開にして、その勢いのまま一直線、地面に叩きつける。装甲を貫通した光が敵を串刺しにしたところで、カメラから光が消えていった。ISのセンサーが敵の機能停止を告げる。心臓部をやったらしい。完全な、沈黙。俺達の勝ちだ。

守りきれた。みんなを守ることができた。

「ふ〜……なんとか、なつたな……」

安心してサーベルから手を離して、力なくその場にプカプカ浮かぶ俺。ああ、ISの作り出す無重力の感覚が心地良い。空中遊泳っ

ていうのも、案外悪くないんだな。あれだけ宇宙にいたのに気がつかなかった。

「シン！ 大丈夫か！？」

「一夏！ 怪我はないか！？ 凰も無事か！？」

逆さまになったまま、近づいてくる二人の安否を確認する。多分、怪我はないと思うんだけど……

「俺は大丈夫だ。それよりお前の方は」

「ばっか、一夏！ アンタ、衝撃砲を背にして突撃したでしょ！ そんな無茶して死ぬ気！？」

「はあ！？ おい一夏！ あんまり危ないことするなよ！ 何かあったらどうするんだよ！！」

特攻の際に大分無理をしたらしい。危ないだろ、まったく。

「まあまあ、シンのおかげで早いとこ決着ついたし。良いじゃないか」

「あのなあ……無理するなよ。ホントにさ」

「アンタも人のこと言えないじゃない！！ 砲撃に合わせてカウンター狙いに行ったでしょ！！ 失敗したら直撃よ！？」

「それは……成功したから良いだろ、別に！」

凰がやれやれといった様子でため息をついた。どうやら、俺もかなり呆れられてるみたいだ。悔しいけど、ちゃんとした反論ができない。

なんだかんだと喋っている間に、先生達がやって来た。後の処理は先生達に任せて、よし、一件落着。三人でピットに向かおうとする

「アス力、どこへ行く？」

「へ？」

織斑先生に呼び止められた。気のせいだと思いたいけど、明らかに怒っている。先生の後ろに鬼が見えるのも、幻覚に決まっているさ……

「さっき言ったな？ 反省文でも菅倉入りでもなんでもします、とな」

「あの、いや、それは……」

「来い、指導室で説教だ。たっぷり、な」

「うええええええええっ!？」

全然、落着なんてしてなかった。首根っこを引っぱられて、俺はふわふわ浮いたままアリーナを後にするはめになった。黙って俺の様子を見ていた二人は、両手を合わせて遠い目をしている。俺を助け いや、無理だな。

ステラ……俺、いつもこんなばかりだ。たまには誰か助けられないのかな？ え、やっぱり無理？ うん、そうだよね……

「何か言いたいことはあるか？」

「いえ……ありません」

「もう、こんなことしちゃダメですよっ!？」

「はい……申し訳、ありませんでした……」

絞られた。たっぷり絞られた。修正された方がまだ安いぐらいに。反省文……というより、始末書もいっぱい書かされた。まあ、IS

を勝手に起動させて戦闘行為まで始めたんだから、これは仕方ないか……

それで、説教のほうは山田先生と織斑先生のセット。人数が増えるだけで、ここまで辛いものになるなんて……命令無視は良くないな。レイ、相変わらずの俺でゴメン……

ちなみに、器物破損させた篠ノ之はたいしたお咎め無し。どうしてだろう……間接的な原因が俺だからか？ まあ、お咎め無しならそれで良かった。

「よろしい、では部屋で休め。私は仕事に戻る」

「了解であります……」

「何度言わせる？ 敬礼はよせと言った。まだ説教が足り」

「いえっ！ シン・アスカ！ 退席させていただきますっ！！」

逃げるようにして生徒指導室を飛び出る。気付けばとつくに夕方を回っていて、空は赤みを帯びていた。窓の外を見れば校舎もきれいな朱色にそまっっていて、なんだか物悲しさも感じられる。多分、さっきまでのお説教のせいだな。

拘束から開放されたことだし、まず一夏の様子を見に行くことにする。全身打撲で保健室に行ったって、山田先生から聞いたし……だから無理をするなって言ったんだ。

アレ、保健室ってどっちだっけ？ この学園、無駄に広いからなあ……たしか、別の棟だっけ？ なら玄関に出た方が早いかな。

階段を下りて玄関口に向かうと、下駄箱で誰かがたたずんでいた。両手を背中に回して、下駄箱に寄りかかって、うつむいて……俺が来たのに気付いて、顔を振り上げた。

「遅いわよ。あたしがどれだけ待ったと思ってんの？」

「鳳？ アンタ、なんでこんなところに？」

「質問に質問で返さないの」



「あ、アンタ……さっきのあのセリフさ。アレ……その、どういう意味？」

さっきの、あのセリフ？ そう言われてもぴんと来なくて、記憶を必死に辿る。何か俺言った？ 礼はいらないってことの意味か？ 別に、そのまんまの意味だと思うんだけど……それとも別のことか？

「ほら、アリーナで……お、俺がお前のこと守るみたいなこと、言っただじゃない……？」

「あー、なんだ。そっちな」

「そう、アレ！ ……いや、私はそんな気はないんだけど、えっと……」

体をもじもじとさせて、上目遣いでこっちを見て、「じょじょ」と嵐が呟く。別に変なこと言ったつもりはないし、言葉通りの意味だ。

「そのまんまだよ。俺がアンタのこと守るって、言った。大切な人だから」

「~~~~っ！ た、大切って、そ、それって……それ……」

そつだ。何度だっと思ったこと。俺が、今度こそ守ってみせると決めたこと……

「一夏もアンタも、この学園の大切な“仲間”だからな！ 俺が、皆のこと守ってみせるさ！」

ズガンツととんでもない音を立てて、下駄箱の後ろからとか、階段の陰とかから、女子が一斉に滑り出してきた。ありえないものを見たように、皆が皆、小刻みに体を震わせて、ついでに頭も横に振っている。ていうか、皆どこにいたんだ!? 全然気配なんて感じなかったぞ!?

「ア……も、……と同じ……ね……」

「へ? 何だつて?」

周りの皆と同じように、ひざから崩れ落ちて肩を振るわせる風が何事かを呟いた。それを聞き取れなくて、聞き返そうとしたら、凰がガバリと顔を上げた。

「アンタも一夏と同じような奴なのねっ! 何よっ! 一人で勘違いして、緊張してた私が馬鹿みたいじゃないっ!」

「はあ!? ちょ、何だよ!? どういうことだよ!」

「うるさいっ、唐変木っ!! はあ……どう断ろうとか、傷つけちゃ悪いとか、いろいろ考えてたのに……私もう行くから……じやあ、またね」

頭を抑えて、フラフラと行ってしまった。マズイな、何か悪いこととした? 身に覚えがないんだけど……

「アスカくん……今のはちょっと……」

「もしかして……アスカくん、鈍い?」

床にずっとこけていた女子が皆、俺のことを哀れむような目で見つめてきた。今までとは質の違った視線の包囲網。恐ろしいことに、以前とは比べ物にならないぐらい視線が痛い。何だ? 俺、何か言った? 教えてくれよアスラン! アンタなら分かるんじゃないか

！？

「み、皆なんでため息ついてるんだ？ ちょっと待ってくれよ、なあ？ 俺の何が悪かったんだ？ 止めてくれ！ そんな目で俺を見ないでくれ！ いや、だけど待ってくれ！」

原因のはっきりしないまま、俺は一人で玄関に取り残された。あー、もー、何だっつてんだよ……でも、とりあえず嵐には明日謝っておこう……怒らせちゃったみたいだし……

深くため息をついて、とぼとぼと保健室に向かって歩き出す。今度は夕日が本当に悲しく見えて、ついでに言えば、眩しかった。

#### 第四話『明日を乱すもの』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて二ヶ月間ゲームをハシゴして逃避してしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

## 第五話『明日の仲間たち』（前書き）

以下のことにご注意ください。

- ・勢いで書いてます。推敲が足りていません。
- ・不定期更新です。すみません。
- ・気に入らないことがあったら、遠慮なくおっしゃってください。
- ・話の切れ目が適当です。なるべく次回は早く更新します。

## 第五話 『明日の仲間たち』

「あー……手が重い」

六月頭の、日曜日の夕方六時ごろ。織斑一夏は、寮の自室でベッドに沈んでいた。たまの休みということで、旧友である五反田の家に遊びに行き、エアホッケーの連勝記録を十六まで伸ばしてきたのだ。名誉ある連勝記録の代償は、腕に鉛のように巻きつく疲労である。

「うーん……」

何の気もなしに部屋を見回してみても、ベッドは一つしか存在していない。先週末までは幼馴染である篠ノ之箒と同室だったのだが、ようやく個室が用意されたのだ。個室といっても、キッチン・シャワー付きであり、広さも十分。先週末までの慌しさが嘘のようであり、一夏はのんびりとした個室ライフを満喫していた。

慌しさの原因である箒は『学年別個人トーナメントで優勝したら付き合え』をした後すぐに逃走。いったい何に付き合うのかは、聞きそびれてしまった。

学年別個人トーナメント 全員参加の、IS対決のトーナメント戦。一学年訳百二十名なので、かかる期間が一週間。大規模なイベントであり、それだけ校外からも注目されるのだが

「優勝、ねえ……」

箒の発言が一夏の頭をよぎる。姉の織斑千冬に恥をかかせないぐらには、という思いもあったが、今はそれより優勝候補のことが気になっていた。箒の優勝は、まず阻まれるだろう。一つの確信が、

一夏にはあった。

(優勝は、シンだろうな)

シン・アスカ　IS学園一年一組所属の、二名しかいない男子生徒の内の一人。そして第一学年最強を謳われる男。そして一夏にとって、なくてはならない仲間でもある。

本人の謙遜に加えて、珍しい男子生徒であるからと本気にしないで、はやし立てて言っている生徒も多い。しかし模擬戦での経験から、一夏はシンの実力を高く評価していた。

理由は分からないが、シンは戦闘そのものに慣れていた。

ISの操縦技術は自分と同様に初心者であるのだが、いざ戦闘を開始するとその動きは自分とは比べ物にならないくらい洗練されている。敵の動きを見て、どう動くべきなのかを体が知っているようなのだ。

さらに、尋常ではない反応速度もシンの武器である。生身での反応速度から、あの鈴を越えているのだ。ISを装着していても、その速さは頭抜けている。

そして最後。ISの操縦技術や知識、そんなハンデを覆すものを持っている。意志の力だ。あの赤い瞳の中にある、燃えるような意志。どれだけの不利な状況でも、一筋の光を導くもの。度々口にする、守るとい言葉。

悔しいが、今の段階で勝ち目はないだろう。現に一夏は、シンとの模擬戦で一撃も当てられたことが無い。

それでも、一夏はシンに勝ちたいと思っていた。

「……やってやる」

技術も、経験も、能力も　　全て自身の上を行っている相手。それでも、負けられないもの。

大切なものを守りたいという気持ちだけは、譲りたくはない。袖の中のガントレットを宙にかざし、一夏は決意を新たにした。

(また訓練、がんばらないとな)

そこまで考えて、その訓練をいつもシンに見てもらっていることに気付き、一夏は思わず苦笑した。　普段は気にならないが、一ツ年上であるからなのか、シンはとても面倒見が良かった。生来の氣質でもあるのかもしれない。

意外に子どもっぽいところもあるくせに、時には自分よりずっと大人びた面も見せてくる。

姉が一人いるだけの一夏にとって、シンは友人であると共に、頼りになる兄のようにも思えるのであった。

「お兄ちゃん、今度は映画観に行こうねっ！　約束だよっ！」

「ああ、約束するさ」

六時過ぎの駅のホームは、帰宅する人たちでごった返していた。

これから俺も、その中に混じって学園に戻らなきゃいけない。

けど、今日一日はとても楽しかった。

笑顔で小指を差し出してきたマユと指切りをして、頭をくしゃくしゃとなでると、マユは嬉しそうに目を細めていた。その顔を見ると、俺も胸がいっぱいになる。

「おう、何かあったら連絡しろよ。特に、イグナイテッドの調子がおかしかったらすぐ言えよ？」

「はい、葛城さん。今日はありがとうございました。見送りまでしてもらって……」

「なーに、せっかくの休暇だ。マユと出かけるのも久しぶりだしなあ」

そう言つと葛城さんは、頭をかきながらからからと笑う。普段の白衣姿から一転、シャツにジーパンというラフな格好だけど、相変わらずシャツの着こなしはだらしがない。

ハプニングの中、クラス別対抗戦が終了。というわけで、イグナイテッドの調整、各シルエットのデータの整理、新シルエットの搭載などなど……学園ではできないことをしてもらつたために、俺は昨日の夕方から研究所に帰っていた。久しぶりにマユの顔も見つけたし。

そんな俺を氣遣つて、葛城さんは土曜日の夜の内にISの調整を終了。日曜日は丸一日休みをとつて、三人で出かけることにしてくれた。マユのリクエストもあつて、一日水族館観光。その水族館、定番のイルカショーも大きな人気なのだけど、なによりユニークなお土産が好評を博しているらしい。特に人気なのが『ドキドキ！マリנקッキー！！』（税込み1029円）で、様々な形のクッキーの中、サメ型クッキーを引いたら負けという、パーティーゲームにもつてこいな代物。俺もクラスのみんなにお土産ということので、三つほど購入しておいた。

そんなわけで、久方ぶりの家族サービスということも手伝つて、マユは一日中楽しそうだった。葛城さんも、マユも、元気そうではよりだ。

「本当に……ありがとうございました。俺、嬉しかったです」

「いいんだよ、マユも喜んでんだからな。なあ、マユ？」

「うん！でも、私達のことだけじゃなくて、お父さんもたまには

休まないとダメだよ？」  
「ははっ、違いねえや」

三人で笑っていると、先日の乱入者騒ぎも嘘のようだ。誰が、どうして、何のために、全部わからないらしい。この件に関しては口外禁止になっていて、膨大な始末書と一緒に誓約書も書かされたんだけど……大丈夫かな……

「はいつ、これっ！ 貸してあげるから読んでおいてね、お兄ちゃん！」

「え？ マユ、これは？」

手渡されたのは一冊の本。カバーがかけてあってタイトルは見えないけど、結構な厚さがある。

「今度観る映画、その本が原作なの！ だからちゃんと読んできてね！」

「へー……分かった。ありがとな、マユ」  
「えへへー……」

もう一度頭をなでると、マユの頬が思いっきり緩んだ。つられて俺の頬も緩んでしまう。もうお別れの時間なのが、名残惜しくてたまらない。

「そろそろ電車が来る頃か。じゃあな、シン。今度会うときまでに、渡した装備は使えるようになったとけよ？」

「うえっ！？ まだプラスチックが残ってるのですか！？」

「お兄ちゃん、ガンバレ！」

今度は俺が苦笑する番だった。追加された装備二つは フォー

ス・ソード・ブラストの三つはインパルスと同じだったんだけど俺の乗っていた機体が元になつてはいなかった。まさか“あの二人”の装備とはなあ……けど、だからこそといった気合も入る。二人には笑われたくない。

「じゃあお兄ちゃん、またねっ！」

「ああ、マユも葛城さんも、元気で！」

「おう、良いデータ待ってるからなー」

改札を抜けて最後にもう一度、二人に敬礼をした。学園に戻るこゝとが寂しい反面、みんなにお土産を渡すのも楽しみだ。大切な人たちと笑っていられる今、俺は幸せなんだろう。

いつか俺は帰らなければいけないけど。

それでも今だけは、もう少しだけ。

明日も、明後日も、その先も……こうしていられることを望みながら。

駅のホームの階段を、一段ずつゆつくりと上っていった。

そう言えば……映画って何を観るんだろうな？ さっき渡された本が原作って、マユは言ってたなあ。帰ったらちよつと読んでみようって。

そして月曜日の朝。心機一転、今日からまたがんばるぞ！ と、言いたいところなんだけど……朝から俺は頭を抱えていた。

「まいったなあ……約束しちゃったもんなあ……」

「おはようシン……って、どうしたんだ？ 頭抱えたりして」

「あ、一夏。おはよう、実はさ……」

挨拶を交わして早速に相談事。悩みの原因は、昨日マユに渡された本だった。

読書が苦手なわけじゃない。むしろオーブにいたころは本はよく読んでいたぐらいだから、好きな方ではある。でも、内容の好き嫌いぐらいは俺にだってある。

「今度マユと映画を観に行くことになってさ、その原作だから読んできてねって言ってこの本を渡されたんだ」

「ふーん、それで？」

「その本の中身がさ、その……俺の苦手な内容で……」

とりあえず一夏に本を手渡してみる。首をかしげて本を開き、一夏がタイトルを読み上げた。

「ボクはホントはオナナのコッ！」 ……なんだコレ？」

「え、織斑くん、知らないの！？ 今すっごく流行ってるんだよ！？」

「今度映画になるんだよね？ いいな、観に行きたいな！」

周りで何かのカタログを見ていた女子生徒が、一斉に俺達を取り囲んだ。ああ、女子は好きなんだろうな、こういうの。確かにそういう内容だった。

「なあシン、どういう話だったんだ？」

「それは」

「えつとね、主人公の『香菜ちゃん』は高校一年生。ホントは女の子なんだけど、お家の事情で男子校に通わなきゃいけないのね！で、高校のルームメイトになったのが『健一くん』って男の子なんだ！」「自分が女の子だってバレたら大変！香菜ちゃんは必死に男の子のフリをします！ところがルームメイトの健一くん！香菜ちゃんが女の子だってことにまるで気付きません！激鈍なんだねっ！」「でもでも、すっごく優しい健一くんのことを香菜ちゃんは好きになっちゃいます！健一くんが好きっ！でもそれを言ったら自分は高校にいらなくなっちゃうっ！さあ、果たして香菜ちゃんは健一くと結ばれるのかっ!？」

「……っていう話なんだ……」

俺が説明する前に皆が説明してくれたよ、ありがとう。自分で話すのも気が引けていたから良かった。

そう。この本、あまりにも少女趣味と言うかなんと言うかな内容で……つまり、俺の趣味じゃない。これを映画で観るのは非常に遠慮したかった。けど、マユと指きりまでしてしまったので、今更変更なんてできない。ため息の一つや二つ、吐きたくもなる。

あらすじを聞いた一夏は半ば呆れ顔で、苦笑いを浮かべていた。

「……健一くん鈍すぎやしないか？ 気付くよな、普通？」

「普通じゃないんだよ、健一くんは。先輩も含めて」

健一くんの先輩である『彰さん』。これもまた、とんでもない先輩だった。過去に行ったことといえば『彼女に同じプレゼントを延々とあげ続けていたら、いつの間にか彼女は自分の親友に取られた』とか、『彼女に指輪をあげた途端に長期間放置。当然、次にあった時には彼女は指輪をしていなかった』とか……優柔不断で、全く頼りになりそうもない。

俺の上司でさえ、普段は頼りなくてもきつちり決めるところは決めたというのに……健一くんは残念なことに、彰さんにアドバイスを求めてしまう。ダメだつてば健一くん、そんなへタレを参考にしちゃ。

「ははは……シン、ドンマイ」

「はあ……上映中に寝ちゃいそうだよ、俺」

「映画ですか……いいですねえ、恋愛映画……」

だらしなく机に突っ伏す俺の耳に、副担任の山田先生の声が入ってきた。顔を上げると、山田先生は少し遠くを見つめてウツトリしている。

「映画の中で抱き合う二人……その時、映画館の二人の手もそつと重ねられて……それから……」

「素敵っ！ 女の子の夢だね、山ちゃんっ！」

「山ぴー分かってるなあ……」

先生と一緒に女子生徒が複数名、頬に手を当てて惚けていた。辺りの空気がほわほわとして、ハートマークがふわふわ浮いて……苦手だ、この雰囲気。女子つてどうしてこういう話が好きなんだろうな？ ハートマークを手で払いのけながらそんなことを考えていると、この空気におおよそ似つかわしくない声が教室に入ってきた。

「諸君、おはよう。全員席に着け」

「おはようございますー！」

一組担任、織斑先生の一声で教室の雰囲気は一変。みんなが整然と座りなおして、ハートマークはどこかへ逃げていった。流石は織斑先生。俺もその手腕を見習おうか……いや、やっぱり止めとこ。

「今日から訓練機を使用しての本格的な実戦訓練に移る。ISスーツは今日が申し込み日なので、各人のスーツが届くまでは学校指定のものを使ってもらおう。忘れたものは学校指定の水着で訓練参加、それもないなら下着で受けてもらおうからな」

あー、今日ってスーツの申し込み日だったんだ。皆が見てたカタログはそれだったんだな。うーん……普通はパイロットスーツとかって所属とか階級とかで規格を統一するもんだと思ってたんだけど、ISスーツはかなり自由がきくようになっていて、学園でも個人のスーツ所有が認められている。こんなところでもおしゃれに気を遣うんだな、女子って。

ちなみに俺のスーツは葛城研で作ってもらった。デザインは俺が着ていたZAFETのパイロットスーツを参考にしているけど、FAITHのマークは……葛城さんに頼んで消してもらった。

信念・忠誠・信頼……もう俺には、FAITHを着ける資格があるなんて思えなかったから。

「では山田先生、ホームルームを」  
「は、はいっ」

……って、いけない。連絡事項、聞いてなかった。仕方ない……後で一夏に聞こう。

「今日はみなさんに、なんと転校生を、しかも二名！ 紹介します

！」

「え……」

「……えええええっ!?!?!」

また転校生がやって来るらしい。教室中がざわざわとして、落ち着きがなくなる。今回は転校生の噂なんて立っていなかったのだから、尚更だ。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人。その姿を見て、クラスは静寂に包まれる。

銀の長髪、左目の黒い眼帯。そして小柄な体から発せられる『軍人』然とした雰囲気。

そしてもう一人。眩い金髪の、貴公子然とした立ち振る舞い。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

啞然とするクラス一同に礼儀正しく挨拶をして、優しそうな笑顔を向けた。

なあ……………今度の転校生って……………

「お、男……………？」

「はい。こちらに同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

ついに三人目の男子生徒。しかも一組に一同に揃っている。これなら、女子の反応はそりゃ凄いことに……………

「えっと、シャルルだよな？」

「は、はい」

「耳、ふさいだ方が良い……………」

「ああ、早くしないと……………」

「へ？」

混乱した表情のまま、転校生は耳をふさぐ。次の瞬間

「「「きゃああああああ　　っ！」「」」

大きな歓声が教室を、それこそ物理的に震えさせた。もう衝撃波と言ってもいいくらいに。

「男子！ 三人目だよ！」

「またタイプの違った！ 美形の！」

「神様、このクラスに入れてくださってありがとうございます！  
今度のお賽銭千円札入れちやいます！」

「いけない！ 夏コミの予定練り直さないと！」  
「静かにしろ、全く……」

きゃあきゃあとはしゃぐ女子を、織斑先生が面倒だとばかりに蹴する。織斑先生、ものすごい男前ですね。本人の前で言ったらどうなるかは想像したくないので割愛。

「えっと、み、みなさん。まだ自己紹介終わってませんよー」

その一声で、また教室が静まり返る。これまた見た目から特徴的な転校生が、腕を組んで静かに目を閉じていた。

「挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

従順な返事に正しい敬礼。軍の模範生のようなその動きに、クラスがもう一度啞然とする。ていうか……教官？　なんか一夏から聞

いたけど、事情があつて織斑先生はドイツで軍の教官を務めていたらしい。ということは、その関係者？　じゃあまず間違いなく……軍人だな。

「ここでは教官と呼ぶな。織斑先生と呼べ。それから……他の阿呆にも言っているが、敬礼は止める。ここは軍じゃない」  
「了解しました」

言いながらチラリと俺を見る織斑先生。ああ、俺は阿呆ですかチクシヨウ……まあ、今だに敬礼の癖が抜けてないから、言い返せるわけないんだけどさ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」  
「い、以上ですか？」  
「以上だ」

けんもほろろ、一切を拒絶するような返事。何も言つつもりがないらしい。おろおろとする山田先生を尻目に、つかつかと俺の前にやってきて……

「！　貴様が」  
「……………っ！？」

腕が大きく振りかぶられ、それが俺の顔面に向かって放たれた。明らかに敵意をむき出しにして近づかれれば、俺だって身構えるいきなり打たれた平手を腕で払いのけた。小柄な体から想像できない、躊躇ない威力。

あまりの展開にみんな、ぽかんと口を開けていた。

「し、シン。大丈夫か？」

「いきなり何するんだよっ!？」

「ほづ……受け止めたか。腐っても教官の弟ではある、ということか」

はあ？ 弟？ コイツ何言ってるんだ？ それは隣の一夏だろ？

「ラウラ」

「はっ、何でしょうか」

「私の愚弟は、その隣の奴だ」

「っ!？ ……了解です……」

一言返事すると、ラウラと呼ばれた生徒は顔を赤くして、俺達二人をキツと睨みつけた。そしてまたつかつかと空いた席に歩いていき、どさつと腰を下ろす。

待て、人違いした拳句に謝りもしないのか？ そもそもいきなり人を叩こうとして何の言葉も無しか？

「おいっ！ アンタどういうつもりだよっ！ 聞いているのかっ!！」

「……」

「アスカ、それぐらいにしておけ。ホームルームはこれで終了。各人、すぐに着替えて第二グラウンドに集合だ。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！」

この話はお終い、とばかりに織斑先生が手を叩いた。正直言っただけ納得できないけど……早いとこ教室から出て行かないといけなから、ぐつとガマンする。

いちいち空いてる更衣室をチェックして、そこまで移動しなければいけないのが辛いところだ。流石に女子と一緒に着替えられない。

「アスカ、デュノアの面倒はお前が見てやれ。ああ、それから今日からお前はデュノアと同室だ。放課後荷物をまとめる。部屋を移ってもらう」

「はい、了解であります」

勝手に敬礼をしそうになった腕を抑えての返事。部屋の移動か…  
…たいした荷物があるわけじゃないから、移動は楽だな。誰かと相部屋になるのもミネルバ以来だ。

「えつと君がアスカくんで、そちらが織斑くん？ 始めまして。僕はシャルル」

「ああ、挨拶は後にしよう。早く抜けないと」

「シン、俺が前に出る。シャルルは一番後ろがいいな」

「え？」

挨拶の言葉を途中で遮られて、事情が飲み込めていない様子 of シャルル。まあ、説明しなくても廊下の様子を見れば分かるはずだ。

「ちょっと走るけど、大丈夫だよな？」

「え？ う、うん」

「心配するなつて。シャルルのことは俺が守るからさ」

そう言つてシャルルの手を取つて、一夏の後ろにつく。三人で一列縦隊、目指すは第二アリーナの更衣室だ。

「行くぞっ！」

「了解っ！」

「え？ え？ え？」

一夏の声を合図に三人で廊下に飛び出した。他のクラスから覗き

に來た女子たちを次々に抜き去り、階段へと駆け抜けていく。人だかりをかき分け、前へ前へ。

「転校生発見しました！」

「小隊単位で移動中！ 速いです、追いつけません！」

「ちいっ！ 第二部隊で足止めを！ 校舎を出る前に食い止めるのよっ！」

予想通り、今日は女子の人数が半端じゃなかった。ものものしいセリフや通信機が、その気合の入りを物語っている。通信機なんてどこから持ってきたんだ？ それにいつ部隊が編成されたんだ？

「ここまで来れば安心だな。シャルル、平気か？」

「うん、大丈夫だけど……」

「早く慣れたほうがいいぜ？ しばらくはこんな調子だろうからな」  
階段を飛び降りるように下りて、追っ手を振り切り、早々と校舎を出ることができた。速度を落として、駆け足でアリーナに向かう。慣れてくればこれが準備運動代わりになるので、着替え時間の確保に加えてストレッチの時間も多少節約できるわけだ。

「それにしても、何でみんな騒いでるの？」

「え？ 男が少ないから目立つんだろ？」

「つまり俺達はウーパールーパー状態なわけ」

まだシャルルは困ったような顔をしていた。ああ、多分ウーパールーパーが分からないんだろう。確か

「ウーパールーパー。二〇世紀の珍獣で、昔日本で流行ったんだとさ」

「ち、珍獣？」

「一夏、その例えだと分かり辛いつて。パンダならもつとグローバルで……」

「あ、パンダなら知ってるよ。中国のカワイイ珍獣だね。あ……結局珍獣だ」

自分の言ったことに気付いてクスクス笑うシャルル。俺と一夏もつられて、三人で一緒になって笑う。いや、仲間が増えたのはいいことだ。珍獣の仲間だけだ。

「よし、到着！ ……と自己紹介がまだだったな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺はシン。シン・アスカだ。シンって呼んでくれ。これからよろしくな」

「うん。二人ともよろしくね。僕のことシャルルでいいよ」

プシュツとドアの空気が抜ける音を聞きながら、俺達は自己紹介を済ます。シャルルの人懐っこそうな笑顔を見て、さっき叩かれかけた怒りが少し薄まった。全く……ラウラ、だったっけ？ アイツが男じゃなくて良かったよ。男だったらまず間違いない殴りかかっている。俺も少しは気の短いのが直ったつもりだけど、流石に、突然叩かれそうになれば頭に来るさ。

「えっと……ねえ、シン……」

「どうした？ 何でも聞いてくれよ？」

「いや、その……手……」

「ああ、悪い悪い」

そう言えばシャルルと手を繋ぎっぱなしだった。いけない、気をつけないとまた男色家疑惑が浮上する……一夏どころか、シャルル

まで巻き込むわけにはいかないからな。

でも、手を繋いだぐらいでどうしてそんな噂が立つんだ？ ヴィーノはしょっちゅう俺達に抱きついてたのに、誰もそんな噂立てなかったぞ？ ……アレか、人柄って奴なのか？ なら俺の人柄は信用されないってことなのか……？ ちよつとシヨックだ。

「シン、どうしたんだ？ 早く着替えちまおうぜ？」

「あ、ああ。そうだな……あれ？ シャルル、どうかした？」

「いや、何でもないよっ！？ き、着替えるから、そのっ、あっち向いてて……」

「ん？ ああ、いいけど……」

どうしたんだろう？ シャルルの奴、なんかもぞもぞして……何か着替えるのに不都合があるのか？

シャツを脱ぎ捨てながら、一夏とお互いに顔を見合わせる。一夏も不思議そうな顔。

そう言えば、こんなシチュエーション……どこかで、見たことあるような、いや、本で読んだことあるような……

「あっ！ 思い出した！ シャルル、お前もしかして……」

「っ！？ いや、僕はっ！ それはっ！！」

「ゴメン、気がつかなくてっ！！ 俺達は手前で着替えるから！！ シャルルは奥に行ってくれー！！」

「……へっ！？」

「一夏、ほら、こっちだっ……」

「なんだ？ シン、どういうことだ？」

気付いていないらしい一夏に、シャルルに聞こえないように声のトーンを抑えて説明する。

「ほら、事故で怪我とか火傷の痕が残ることあるだろ？ あれ見られるの嫌がる人もいるんだって」

「ああ、そういうことか！ やべ、気が回らなかつたな……分かつた、気をつける」

アカデミーの本に載っていた、仮面をつけた金髪の人。火傷の痕を隠すために仮面を着けてるって話だった。えっと白服のエースパイロットで名前は……なんだったかな、ラウ・なんとかさんだっけとにかく、そういうのを気にする人は気にするから、こっちも気を遣わないと。

……なんだかんでもない勘違いをした気もするけど、気のせいだよな。気のせいな……はず。

「着替え終わったか？ シャルル、悪い。俺ぜんぜん気付かなかつた」

「今度から、俺達もつと気をつけるよ」

「い、いや、いいよ別に。ありがとう……」

更衣室を出てグラウンドに向かう道すがら、改めて俺達は謝る。シャルルも許してくれたみたいだ。うーん、懐が広い。どっかの誰か達に見習わせたいよなあ……すぐに木刀振り回す奴を筆頭に。どこで聞かれてるか分からないから、言わないけど……

「シャルルは優しいな。どっかの誰か達に見習わせたいぜ……」

「どっかの誰か達？」

「ああ、木刀振り回す人間凶器の幼馴染とか」

「っ！？ 一夏、それ以上言っちゃダメだっ！？」

しまった。一夏は全く俺と同じことを思っていたらしい。そして、それを口にしてしまっている。さらに言えば、一夏は気付いていな

い。鬼さえも逃げ出しそうな殺気が三つ、背後から近づいてきていることに……

「すぐに銃を撃つ短気なお嬢様に、これまた短気で口の悪いセカンド幼馴染とかにな」

「シャルル、逃げるぞ」

「へ？」

俺は後ろを振り返らずに、シャルルの手を再び取って全速力で走り出した。きよとんとしている一夏を置いていくのは少し心が痛むけれど、そんなことに構っていられないと俺の中の防衛本能が叫び声をあげる。

「シン、シャルル。何で走るんだ？ まだ時間は余裕が」

「そうだな、一夏……貴様が念仏を唱える時間はたっぷりあるぞ？」

「ええ……一夏さん。覚悟はできていました？」

「短気で口が悪くて、何だっけ？ もう一度言ってみなさいよ？」

「っ！？ 箒、セシリア、鈴！？ シン、助け」

背後から身も心も凍りつくような悲鳴。ゴメン、俺……守るって言ったのに。守るって、言ったのに……頼りにならなくてゴメン。

「シン、一夏のことはいいの？」

「シャルル、一夏のこととは忘れちゃいけない。アイツは良い奴だった」

「ぶっ……あははっ！ 一夏もシンも、にぎやかで面白いなあっ！」

「何だよ、笑うことないだろっ！？」

「ふふ、シンも笑ってるじゃない」

二人で笑いながら、グラウンドに向かって走り続ける。

今日の訓練も、気を引き締めてがんばろう。

また一人、大切な仲間ができたんだから。

その明日を守るように。みんなの明日を守るように。

「おおあああつつつつつつ！！！！」

それから、遠くで悲鳴をあげ続ける大切な仲間が、無事に明日を迎えられますように。

第五話『明日の仲間たち』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて『バイクと合体！ ちくわヘルシー究極体！』になった拳句に爆砕してしまいます。お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第六話『明日からよろしくね』（前書き）

以下のことにご注意ください。

- ・今回はとても短いです。ごめんなさい。
- ・次回更新は土日になると思います。
- ・誤字脱字、バンバンご指摘ください。

## 第六話 『明日からよろしくね』

大切な仲間という尊い犠牲のおかげで、俺とシャルルは授業の開始に間に合った。

六月の頭。まだ梅雨入りしていないおかげで、グラウンドはからっと渴いていて気候も申し分なし。朝の日差しもさわやかで、時々聞こえる小鳥の鳴き声が、さつきから耳にこびりついていた友の叫び声をさらさらと洗い流してくれる。

「一夏、お前の犠牲は無駄じゃなかったぞ……」

整列に加わりながら、神妙な面持ちで遠い空に向かって敬礼。失言には気をつけよう、マジで。

そんな俺の様子がおかしかったのか、隣のシャルルも周りの女子もクスクスと笑っていたけれど、今は笑われても構いやしない。そうさ……散っていった友の無念に比べれば……

「アスカ。織斑、オルコット、篠ノ之、凰《ファン》がいないようだがどうした？」

「はっ！ 一夏が他三名の手にかかって星にされているはずですよ！」「そうか。後で全員ペナルティだな」

織斑先生の詰問に対して、友を庇いたてる言い訳もせず正直に報告。腕組みをとりて出席簿を振るう姿は、鬼教官のそれだった。

三人の魔の手から逃れたとしても、今度は鬼教官の手によって地獄に突き落とされる一夏。悪いな……後で薬塗ったり、包帯巻いたりぐらいは手伝うから。

「授業には絶対遅れないようにな、シャルル。もし遅刻したら……」

「そうだね。ああなるのはちょっと遠慮したいかな」

そう言ってシャルルが目をやった先では、四人が仲良く出席簿とスキンシップを始めている。バシンッ！ バシンッ！ バシンッ！  
バシンッ！ 広いグラウンドに四つ、濁いた音が鳴り響いた。

「専用機持ちはアスカ、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。今回は八人グループになって実習を行う」

織斑先生が手を叩いて合図をする。今日からは実戦訓練だ。実践演習も見せてみよう、ということ、さっきまで山田先生がセシリアと凰の相手をしていただけ……二人は見事に惨敗を喫していた。連携の取れてない二人を軽くあしらった山田先生は、皆の見る目が変わったことに気付いて、自信ありげに胸を張っている。山田先生、あんなに動けたんだ……知らなかった。入学試験では手加減してたんだろな。

「アスカ以外の専用機持ち五人がグループリーダーを担当するように。出席番号順に一人ずつ各グループに入ること。いいな？ では分かれる」

「へ？ あの、織斑先生。俺は……」

「お前は山田先生と一緒に各グループの見回りだ」

「あ、はい。了解です」

とりあえずテケテケと山田先生の隣まで歩いて、指示を待つことにする。山田先生は上機嫌で、いつもみたいに慌てた様子もなく各グループに訓練機を配っていた。これなら俺必要ないんじゃないか？  
ちょっと楽ができそうだ。

「アスカくんはグループを一つずつ回ってください。なるべく女子だけのグループの方に行ってくださいね？ そうじゃないと不公平ですから」

「不公平？ や、山田先生、俺だけ外されたのって……」  
「がんばってきてくださいっ！」

にっこり笑って山田先生に送り出された。ああ、そういうことが女子生徒のサービスに俺が各グループを回るってことね……ちっとも楽できそうにないや。

愚痴を言っても仕方がないので、セシリアの班から順番に見ていくことにした。まあ、見るだけなら大丈夫だろう、と軽く考えてグラウンドを歩き出す。

そんな淡い期待は、脆くも打ち破られることになったんだけど。

「……ゴメン、一夏。多分お前を見捨てたから罰が当たったんだ」  
「いや、あれはどうしようもなかった。失言した俺のせいだ」

昼休み。屋上。咲き誇る花と、石畳に円テーブル。華やかな椅子に。最高の日差し。まるで庭園のように手を入れられたその場所で、俺は天を仰いでいた。

各グループの見回りだって？ 見ているだけだって？ 「冗談じゃない。」

実質三班が全部、俺の担当の班みたいなものだった。

なにしろ、女子がみんな“俺に”アレコレ頼んでくるのだ。班長を無視して。

「アスカくん、私パラメータの見方が分からないの！」

「私は起動シークエンス！ 教えて教えてっ！」

「実は動かし方から分かりません！ 手取り足取り教えてくださいますっ！」

「アスカくんっ！」

……あれだけの要求を全てこなせたのだから、もしかしたら俺には教官の素質があるのかもしれない。いや、素質があつたとしても無理だ。教官には絶対になりたくないよ。先生方はいつもこんな苦労をしてたんですね、お疲れ様です。

そんなこんなで、セシリア班、凰班、そしていたたまれない空気全開のラウラ班の三つを回るだけで俺の精神は限界を突破。逃げるように……というか、シャルル目当ての女子で埋め尽くされている食堂から本当に逃げなくて、ようやく人心地がついたところだった。

「失言は許してやろう。しかし……どういふことだ」

「ん？ 折角の昼飯だし、天気もすげーいいし、大勢で食ったほうがうまいだろ」

俺の知らないところで昼食の約束をしていたらしい。なぜだか分からないけど、篠ノ之が不満げに呟いていた。セシリアも凰も、それぞれが妙な緊張感を保ちながら座っている。もうそんなことに気を遣ってられるほど元気じゃない俺は、椅子に力なく腰掛けながら、購買のパンの包みを開けていた。

「えっと、シン。本当にご馳走になって良かったのかな？」

「遠慮するなつて。朝のお詫びと、転校祝いだからさ。それぐらいしかしてやれなくて悪い」

で、俺の隣に座っているシャルル。昼食は食堂でパンを買うとの話だったので、お金は俺が全部持ってそのまま屋上に誘うことに。女子の誘いを丁寧に通っていくその様子は、まるでテレビか映画に出てくる紳士そのものだった。どうしたらあんな振る舞いが身に着くんだろかな？ まあ、俺が知ったところで真似しても似合わないだろうから、いつか。

「困ったことがあったらすぐに言ってくれ。数少ない男子なんだから、俺も一夏も協力するよ」

「ああ、ISのこと以外はなんでも聞いてくれ」

「ありがとう。二人とも優しく助かるよ」

笑顔のシャルルに敬礼で返事。特に俺はシャルルと同室になるんだから、できるだけサポートしないと。俺も一夏も最初のうちは手探りの生活だったから、シャルルにはそんな苦労をかせぎたくない。いや、マジで大変だったからなあ。

「そうだ、一夏。午後の授業はIS整備らしいけど復習してあるか？ 前に白式の調整した時に教えたことを覚えてれば、午後はバツチリだぞ？」

「おお、大丈夫だ。いつもいつも助かるぜ」

放っておけない仲間がもう一人。俺も一夏も学園生活には慣れてきたんだけど、まだ慣れなきゃいけないものはたくさんある。機械の整備に戦術理論の勉強なんて普通の学校で教えることじゃないから、そういう経験のない一夏は大変だ。なので、俺も手伝えることはなるべく手伝うようにしていた。ルナも言っていたように、困った時はお互い様ってことだ。

「ははっ、シンってば一夏のお兄さんみたいだね」

「え、俺が？」

「千冬姉よりよっぽど優しいからなあ、嬉しい限りだ」

そんな大したことしてるわけじゃないのに。でも、そう言ってくれると俺もちよっと誇らしい。思わず鼻の頭をぽりぽりかいてしまふ。

「そんな、俺なんか」

「アスカが兄？ それにしてはコイツは大人気ないな」

「まあ、面倒見の良い所は認めますわ」

「あと似なくて良いところが似てるわね。鈍いところとか」

半眼の女子三人がチラリとこつちを見て、口々に冷ややかな言葉を浴びせる。大人気ない？ 自分のことを棚に上げてモノを言いやがってコイツら……ちよつとカチンときたけど、出かかった皮肉の言葉を無理やりに飲み込んだ。もしここで

『へえー。優しくて大人なお姉さん方三人は弟をいじめたうえに、その弟と一緒にになって怒られるんですね？ ああ、こういうことを言うから俺は子どもなんだって？ 悪いなあ一夏。でも、大人気ないお兄さんはお前をいじめたりしないからな』

なんて言おうものなら、ステラと約束した大切な明日が消し飛ぶ。女尊男卑。女性は強い。男は弱い。

「はいはい、俺は大人気ないですよっ」と

「そういう言い方が大人気ない　ってシン、どこいくのよ？」

「取りに行くものがあるから。みんなはここで待っていてくれ」

パンをほおばったままさっさと走り出す俺。せつかくみんなが集まってるんだから、今の内にアレを使うことにしよう。

「お待たせみんな。ほら、これ、お土産」

テーブルの上に水族館の土産を置くと、みんなの視線がそこに集中する。

仲良しグループとの楽しい昼食。こんな時にぴったりのお土産、その名も

「あ、これ『ドキドキ！ マリンクッキー！』じゃん」

「何だ、それは？」

「まあ、箱を開けてみたら分かるって」

女子の文化に疎そうな篠ノ之。知名度が高いといふこのクッキーも知らなかったらしくて、首をかしげて覗き込んでいた。サメの口の形になっている箱を開けると、中には説明書が入っている。それを取り出した篠ノ之がツラツラと読み上げた。

「なになに……『ゲームのルールだよっ！』」

一・順番を決めてねっ！

二・順番にクッキーを取り出してねっ！

三・サメの形のクッキーを取った人が負けっ！

四・負けた人は、パッケージの底に書いてある罰ゲームだよっ！』

……だそうだ」

「へー、なんだか面白そうだね」

「クッキーでしたら、食後のお茶づけにもちょうど良いですしね」

「罰ゲームか……嫌な予感しかしねえ」

「シン、やるじゃない。順番どうする？」

「席の順で良いんじゃないか？」

それなりに好意的な反応が返ってきたので、レッツ・プレイ。順番は凰・セシリア・篠ノ之・一夏・俺・シャルルだ。みんながテールの中央、サメの口に順々に手を入れていく。

「よつと……カメね。セーフ」

「わたくしは……ペンギンですわ」

「これは星か？ いや、ヒトデだな」

「どれどれつと、これはクラゲか？」

「僕はエイかな。うん、おいしいや。」

「俺は……タコか。セーフだな」

最初は和やかに始まったゲームも、二巡、三巡としていくうちに嫌でも緊張感が高まっていく。サメの口に伸びる手は、噛み付かれることを恐れるように、次第に慎重になっていった。段々クッキーを味わう余裕が無くなってきたぞ、おい。

「……………」

そして最後の一巡。未だにサメを引き当てたやつはいない。残りには六つ、俺の順番は最後。つまり、誰かが先にサメを引かなければ俺の負けだ。ここまで来たら負けたくない。

「わ、私の番ね……」

凰が恐る恐る箱に手を入れる。その手に掴まれていたのは

「イルカっ！ やった、私はあがりねっ！」

「くっつ……わたくしの番……」

ぐつとガッツポーズを取る凰と対照的に、緊張した面持ちのセシリア。その手を残り四人が固唾を吞んで見守る。

「ふふっ！ ラッコですわ。当然の成り行きですわね」

オホホと笑うセシリア。残り四人。次は篠ノ之だ。

「ふーっ……はあっ！」

目を閉じて深呼吸をした後、気合を込めて箱から手を取り出す。頼む。そろそろサメが出てきてもいい頃だっ！

「ふん、シロクマだ。日ごろの修練の結果だな」

篠ノ之は腕を組んで勝ち誇っていた。いつからお前はクッキーを取り出す訓練をしたんだ？ ……じゃない。女子三人は抜けた。残りは俺たち男子三人。

「シン、シャルル」

「え、何？」

「一夏、どうしたんだ？」

一夏は手を箱の上に伸ばしたまま、クッキーを引かずに俺たちを見た。ニヤツと笑うと、コブシをぎゅっと握る。

「恨みっこなしだぜ？ うおおおっ！ 来いっ！」

確立三分の一！ 先に抜けた三人も俺もシャルルも、みんなが身を乗り出して一夏の手を掴まれたもの、勝負の行方を見守る。一夏の手が、サメの口から脱出して天へと駆け上がっていく。穏やかな

午後の光に照らされたものは

「サメっ！ 一夏の負けだねっ！」

「ぐっ……ちくしょう、だから嫌な予感がしてたんだ……」

一夏は肩を落としてクツキーをポリポリかじる。その後ろを女子三人が取り囲んで『情けない』だの『日ごろの行いのせいだ』だの言っただけの討ち。助かった俺とシャルルはその後ろでハイタッチを交わし、残ったクツキーに手をつけていた。さて、罰ゲームの内容は何だろうか？

「ま、どうせたいした罰ゲームじゃな」

ポトリ、空になった箱が地面に落下する。

箱の中の指示を見た途端、一夏は凍りついたように動かなくなっ  
てしまった。真っ青な顔で何も無い虚空を見つめている。

「おい、どんな内容なんだ……」

箱を拾い上げて、五人で箱の中の文字を目で追っていく。

意地の悪そうなサメの絵と吹き出し。

その文字列の意味を脳が処理し終わった時、俺たちは全員吹き出  
していた。

夜になって部屋を移動した俺は、新しくなった部屋でシャルルと  
談笑していた。一夏は事情があつて、今日は一日来れないだろう。

「それにしても……負けなくて良かったね、シン」  
「うん……一夏は気の毒だけど」

負けなくて良かったってのは、あの『ドキドキ！ マリンビスケツト！』のことだ。あんな恐ろしい罰ゲームだとは思ってもしなくて、気楽に買ってきてしまった自分が恨めしい。

恐怖の罰ゲーム。一夏が引き当てた罰は

『今日一日は語尾に“マリンっ！”を付けること！ 例外は認めないからなっ！』

という噴飯ものの内容。流石に織斑先生の前でそんな真似をしたらシャレにならないので免除はしたものの、それ以外では本当に一夏は語尾に“マリンっ！”を付けてしゃべるはめに。

その様子はそれはもうおかしくて、今日一夏と話をして笑わなかった人は（織斑先生を除いて）いないぐらいだ。きつと一夏の心には深い傷が残ったことだろう。明日から口数が減るかもしれない。

ちなみに、一夏がこの部屋に来られない原因がコレ。語尾にマリオンを付けたまま話すのは嫌だって。さらに、それで済まなかったのが一夏の不運なところだった。

「食堂も大騒ぎだったし、一夏は厄日だったんだな」

「すごい盛り上がり方だったね。びっくりしたなあ」

一夏が受けた罰ゲームの事情を聞いた一年一組の生徒は『すつごく面白そうっ！』と言って食堂に集合。第二回の『ドキドキ！ マリンクッキー！』を開始してしまった。そして一組生徒は強制参加。俺もシャルルも……一夏も参加することに。

それでも、ゲームに負けたのは一夏じゃなかった。負けたのは、一夏の隣にいた篠ノ之。普段の固い口調に“マリンっ！”がつくのはさぞ面白い光景だろう。そう思ってみんな笑っていたんだけど……『ドキドキ！ マリンクッキー！』の罰ゲームは一種類じゃな

かった。どうやら、箱毎に罰ゲームの内容が違っらしい。

篠ノ之が受けた罰ゲームは

『前の順番の人にロマンチックな告白を！ あ、告白された奴はちやんと返事しろよっ！』

だった。前の奴？ もちろん一夏だ。今でも思い出すと……ダメだ、笑っちゃ……いや、でも、アレは……

『一夏……私はずっとお前のことが　っ！　好きだった！　好きだっ、一夏あっ！』

『俺もお前のことが、篝のことが好きだマリッ！』

これを聞いて笑うなっるのが無理な話だろ？ 二人とも顔を真っ赤にして、篠ノ之は耐えられなくなったのか木刀で一夏に殴りかかり出した。アレは確かに恥ずかしい。ていうか一夏、よくあんな状況でまで罰ゲームにこだわれたな。

まあ、そんなこんなで心身ぼろぼろの一夏。今日はもう誰かに会いたくないそうだ。だよなあ。

「今日にはぎやか過ぎるぐらいだったけど、これから少しずつ落ち着くと思うから安心してくれ」

「うん、分かった」

「放課後の訓練も明日からかな。シャルルも良かったらどうだ？」

俺も一夏も歓迎するよ」

「いいの？　じゃあ、僕も仲間に加えさせてもらっよ。専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「ああ、決まりだな。」

コーヒーカップを片手に落ち着いた会話。一人部屋が寂しかったわけじゃないんだけど、こうやって話し相手がいるとすごく気持ち楽になる。シャルルは物腰が柔らかだから、こっちも気を置かず

に話せるのがありがたい。

そう言えば、レイともこんな風にコーヒーを飲みながら話してたっけ。訓練の愚痴を言ったり、授業の予習を手伝ってもらったり、たまに怒ったり怒られたり、船に乗ってもそれは変わらなくて、時には大事なことを打ち明けあって……俺にとつて最高の親友だった。

なあレイ、俺もお前みたいになれるかな？ 厳しいところもあったけど、頼りがいがあったて、優しくてさ。アカデミーからずっと、俺の兄貴分はレイだったんだ。お前のこと、俺すっごく尊敬してた。だからさ、俺もお前みたいにがんばるよ。お前の分の明日も生きて、みんなを守ってみせる。

「シン？ どうかしたの？」

「なあ、シャルル……」

コーヒーを飲み干して、カップを置く。今は遠い親友と、今ここにいる仲間にもむけて。

「俺が必ず、シャルルのことを守ってみせる」

「えっ……？」

「約束だ」

守ってみせる。大切な仲間達、大切なもの。今度こそ、全て。

「う、うん……ありがとう、シン」

そう言うとシャルルは、はにかんだように笑った。トクンツと一っ、心臓が大きく跳ねる。えっと、どうしてだ？

「と、とりあえず明日からよろしくな。カップは俺が片づけるから」

「うん、よろしくね」

顔を合わせていられなくて、慌ててカップを持ってキッチンに入る。その後は早めに消灯して寝ることにした。

どうしてなんだ？

真っ暗な部屋で目をつぶっていても、まぶたにはさっきのシャルルの笑顔が張り付いている。思い出すたびに、なんだか心がざわつく。

どうして、だ？

シャルルの見せた、あの笑顔。

見た目も声もまるで違うのに、重なるものがあつた。

メサイアで……最後の出撃の時に見せた、レイの笑顔に。

第六話『明日からよろしくね』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて『グオレンダア  
！』してしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

## 第七話『君がくれる明日』（前書き）

以下のことにご注意ください。

- ・今回も短いです。ごめんなさい。
- ・執筆時、頭が働いていません。本文中にも不備があると思いますので、ご指摘はバンバンお願いします。

## 第七話『君がくれる明日』

フランス代表候補生シャルルと、ドイツ代表候補生のラウラ。二人の転校生を迎えて、俺の学園生活はますます賑やかになっていった。相変わらず勉強と訓練は大変だけど、シャルルという心強い仲間が増えたおかげで、それも随分とはかどるようになった。

なにしろシャルル、俺と一夏に欠けていたISの『知識』がある。完全素人の一夏に、戦闘に関する以外にダメダメな俺と比べたら、その差はまさに『月とすっぽん』ってやつだ。というわけで、いつものメンバーにシャルルを加えて、俺たちは午後の訓練に精を出していた。

「なあ一夏。シャルルの射撃を回避するのはいいけど、その後の姿勢まで考えられたか？ 崩れた姿勢に第二射、第三射って直撃させられただろ？」

「確かに……第一射は避けられたんだけどなあ」

「最初の射撃は牽制だったからね。一夏はそれに引っかけちゃったんだよ」

「うっ……そうだったのか……」

軽い模擬戦の後の反省会。今回は一夏とシャルルで試合をして、結果の分析をしているところだ。語尾にマリンというトラウマを乗り越えて、一夏も結構動けるようになったけど、まだまだ射撃への対応が弱い。接近戦しかできない一夏が戦い抜くには、どうしても射撃をかいくぐる技量が必要になってくる。

「射撃武器の特性も把握しないと、今みたいに回避先を誘導されて追撃されるからね」

「それに一夏は『イグニッション・ブースト瞬時加速』に頼りすぎだ。アレは奇襲をかけるた

めのものだったろ？ 何度も使ってれば、いくら速くても簡単に捌けるさ。動きも直線的だし」

「うーむ……なるほど」

実際に模擬戦をした相手からのアドバイスに、それを観戦していた側のアドバイス。これなら今までより効率良く戦闘のレクチャーができる。シャルルの説明は分かりやすくて丁寧だから、その分の上乗せもあって更に効率的に。いや、今までだって模擬戦の相手は俺以外にもいたんだけど、その相手が

「私のアドバイスを聞いていなかったのか？ 軟弱な奴め」

「せっかく人が親切に教えてあげたってのにさあ」

「わたくしの理路整然とした説明があつたというのに」

向こうで文句を言っている三人だ。篠ノ乃と凰ファンの二人は説明が感覚的すぎて、まず理解ができない。逆にセシリアの場合、説明が整然としすぎて意味が分からない。過ぎたるはなお及ばざるが如し、三人にちようど良いという言葉はないらしい。

ちなみに篠ノ乃の奴は、この前の『マリンクッキー食堂大暴れ事件』以来、一夏と会っても顔を真っ赤にして無視をしかかり。一夏も『罰ゲームとは言え、そんなに嫌だったのか？ 結構シヨックだな……』としよげていたので、俺も付き添って二人で謝ってみた。そうしたら今度は『この鈍感朴念仁兄弟めっ！』って怒鳴られて……その時は逃げ帰っただけけど、どうやらもう許してくれたみたいだ。怒鳴られた原因が分からないままなのは、この際置いておくでしょう。

「一夏の『白式』には後付武装イコライザがないんだよね？ それって多分、ワンオフ・アビリティーに容量を使ってるからかな」

「ワンオフ・アビリティーって……シン、なんだっけ？」

「いや、俺も覚えてない……シャルル、それって何？」

後ろで呆れてため息をついている三人を無視して、俺たちはシャルルに尋ねた。繰り返すけど、俺と一夏に『知識』はない。でも、今はそれを補ってくれる仲間がいる。友情って素晴らしい。

「言葉通り、唯一使用の特殊才能アビリティのことだよ。白式だったら『零落白夜』だし、シンの『イグナイトッド』なら、あの特殊装甲がそうなのかな」

「『フェイズシフト』のことか？ へー、そうだったんだ」

特殊装甲フェイズシフトは、実体弾・実剣のダメージを相転移・無効化する。モビルスーツには結構搭載されてたし、インパルスにも使われたから特別なものって認識はなかったんだけど……言われてみれば、今までフェイズシフト装甲が使われてるISって見たことなかった気がする。

「第一形態でのアビリティバスターの発現なんて前例がないから、白式の拡張領域バスターが空いてないのもおかしくないんだけど……」

「でも、シンのイグナイトッドはどうなんだ？ メチャクチャな容量があるぜ？」

「それは僕にも……戦闘中にパッケージの換装ができる機体ってのも聞いたことがないよ」

やっぱりシャルルでも分からないらしい。勝手に装甲を作るわ、追加武装の設計をするわ、それにプロテクトをかけて使えなくするわ……イグナイトッドは本当に良く分からない代物だった。そもそも、なんで女性にも使えなかった『欠陥品中の欠陥品』が俺に使えたのかも分からない。ていうか、俺がこの世界にいるのも……ああ、やめたやめた。

「考えても仕方ないか。とりあえず話を先に進めよう」

「それもそうだね。折角だし、一夏も射撃武器を使ってみる？」

「え、他の奴の装備って使えるのか？」

「所有者が許可を出せばね」

そう言っただけでシャルルが銃を一夏に渡した。この調子なら俺が見てなくても良さそうだし、自分の訓練でもさせてもらおうかな。

「シャルル、一夏のこと見ててもらっていいか？俺もコイツの練習が必要だからさ」

「うん、良いよ。けど、その鉄パイプはどうしたの？」

「いろいろ事情があつてさ……これを使いこなせるようにならないといけないんだ」

俺の手に握られているのは、研究所で散々お世話になったあの鉄パイプだった。次のシルエットの開放の鍵。それがこの鉄パイプだ。長距離射撃戦対応装備、ブラストシルエット 大口径ビーム砲にレールガン、さらに連装ミサイルランチャーに接近戦用のビームジャベリンを備える火力重視の装備だ。未だにプロテクトが解除されていけないこの装備。その理由は接近戦用のジャベリンだ。

モバイルスーツでもISでも、照準を付けて引き金を引く作業は変わらない。ブラストの装備はほとんど射撃武器だから、感覚の違いに戸惑うことも少ない。きっと手早くプロテクトも解除されるはずだ。と思ってたんだけど……ビームジャベリンのこと、すっかり忘れてた。銃を使った経験？ せいぜいアカデミーで使った銃剣が関の山。

というわけで、またしても俺はISを装着して鉄パイプを振り回すはめになった。今度は鉄パイプをブン投げて、的に命中させられないといけないらしい。傍から見たら、変なことやってるように思

われるんだろつなあ…… ISの訓練なのに、鉄パイプで槍投げつて。そつだ、セシリアのビットでも的にさせてもらおうかな。流石に怒るかな？

「ねえ、あれつてドイツの第三世代型じゃない？」

「ホントだ。まだ試験運用中じゃないの？」

アリーナいつぱいに詰め込まれた生徒が一斉にざわつき始めた。だれかにぶつけないようにと端つこに歩き始めていた俺も、そのざわめきの中心に目を向ける。

黒い装甲を身にまとつた、銀髪はその姿。ラウラだ。自分に視線が集まるのを意にも介せず、その赤い瞳の先には、一夏がいた。刹那、視界に映し出されたウインドウ。戦闘状態の確認、熱源の感知、発砲

「つー！？」

「……ふん、また止めたか」

「アンタ、どういつつもりだ」

右肩のレールカノンが煙をあげている。ラウラはいきなり、氣付いてない一夏に向かつて発砲したんだ。なんとか割つて入れたけど、これだけ大勢の人がいる中で……何を考えてるんだ。

「やはり、な」

「何がだよ」

無表情だつたラウラの顔に薄笑いが浮かんだ。冷たいその笑みが、周囲の空気を凍りつかせる。首筋には、俺が当てているナイフがあるにも関わらずに。

「どこでそのナイフを覚えた？ 抜き方も構えも、素人のものじゃないな」

「アンタには関係ない。どういっつもりかって、聞いてるんだ」

「答える気がないならそれでいい」

そう言つとラウラはナイフに手を添えて、ゆっくりとそれを下ろした。薄笑いは消えて、表情のない顔を、俺と一夏に向ける。

「貴様はなぜそいつと一緒にいる？ 貴様には力がある。そいつと違つてな」

「力があつたら、どうだつて言うんだ」

「簡単なことだ。ここは貴様の居場所ではない。こんな程度の低い場所で、何ができる」

「俺は自分の意思でここにいる。アンタに指図される筋合いはない」  
「助言だ。ここにいて強くなれるのか？ ここでどんな力が手に入るというんだ？」

「ここにいるから俺は強くなれるんだ。アンタの言う力は、もう俺には必要ない」

「力は力だろう？ 貴様も私と同じ場所にいたはずだ。そこで必要なのは、力だけだ」

「それで何ができる？ 何が変えられる？ 力だけで、何も変わりなしなかつたさ」

お互いににらみ合つたまま、その先の言葉は出てこなかつた。

『その生徒！ いったい何をやっている！』

「……今日は引いてやる。だがな、覚えておけ。私は貴様らを認めない。力の無い奴も、力を無駄にする奴もだ」

スピーカーからの声を聞くと、ラウラは戦闘状態を解除した。去

り際にもう一度はき捨てるように言って、アリーナをあとにする。

「お、おい、シン。平気か？」

「シン、大丈夫？」

「平気だ。二人とも怪我はないな？　なら、もう今日は帰ろう」

二人の返事を待たないで、アリーナの入り口に足を運ぶ。

これ以上アリーナにいるのも気分が悪いし、自分でも少し頭を冷やしたかった。

「さっきはゴメンな。ちょっとイライラしてて」

「ううん、気にしてないよ」

部屋に戻ってきたところで、少し気持ちが静まった。帰りの道すがら、三人ともほとんどしゃべらなかった。何か言われても生返事しかしてなかった気がする。一夏にも謝っておかないと。

「夕食まで時間あるけど、シャワーはどうする？」

「……………」

「？　シャルル？」

「あ、ゴメン。先にいただいていいかな？」

「了解」

パタパタとシャワー室に入っていくシャルルの様子は、どこか元気がなかった。気、遣わせちゃったのかな。

「シン、シャルル、いるか！？」

「ああ、一夏か。どうしたんだ？」

ドアの前にいる一夏は、上機嫌なのが見てとれる。だいたいこういう表情の時、一夏は浮かれていることが多い。

「機嫌良いみたいだけど、何かあったのか？」

「さつき山田先生が教えてくれたんだが、今月下旬から大浴場が使えるらしいぜ！」

「本当か！？ やったな一夏！」

小躍りしている一夏ほどじゃないけど、俺も風呂に入れるのは嬉しい。研究所では入れていた分、学園で入れなくなったのは地味に痛かったりする。風呂があるのに入れなくてというのはやっぱり寂しいし。

「へへっ、どうだ？ 二人とも元気なかったけど、これで元気出してくれよ？」

「ああ、サンキュ。シャルルにも伝えとくよ」

お互いに敬礼をすると、一夏は自分の部屋に戻っていった。一夏にも気を遣わせてみたいだ。はあ……こんなんじゃないかって分かってるんだけど……それでもやっぱりラウラとの一件は、俺の胸に重くのしかかっていた。

案の定その日の夜になっても、俺は寝付けないでいた。アリーナでの出来事、ラウラに言われたことが頭の中をぐるぐる回っている。目がさえて、眠れない。

かつての俺と同じ、力への執着。自分を突き動かす、暴力的な衝

動。

目の前にいるのは敵だ、撃て、壊せ、なぎ払え、そうして動けなくさせればいい。力の叫びに飲み込まれて、何も考えられなくなる。はやる気持ち、思いを抑えきれなかった。振り返る余裕なんてまるでなかった。目の前の敵を倒すことが全てで、大事なものを無くしていった。

自分とラウラでは力を求める理由は違うはずだ。けど、理由が何であっても……アイツは力を求めている。危険な方向に、誰かへの敵意を交えて。

俺を止めてくれたのはアスランだ。

なら、ラウラは誰が止めるんだ？ 誰かが止めてくれるのか？

もし止めてくれなかったら、ラウラはどうなるんだ？

いつか俺みたいに、全部無くすのか？

そんなこと、させたくない。俺が止めなきゃ……いけないんだ。

力に囚われてた、俺が。

今月末の学年別個人トーナメント 誰にも負けるわけにはいかない。どんな奴が相手でも、俺は負けない。

ふう、とため息が出た。勝つって思うのは簡単だけど、実際に勝つにはまだまだ訓練が足りない。まずはブラストシルエットを操るようにしないと。長距離射撃戦にまで対応できれば、かなりのアドバンテージになる。トーナメント戦では相手次第で相性が変わるから、全距離で対応できるってのは有利だ。鉄パイプには、もっとながらばってもらわないとなあ。

それから、もう一つ。トーナメントに勝つための奥の手を考えてある。フォース・ソード・ブラストの三つが開放されれば練習もできるんだけど……訓練の手伝い、シャルルに頼むしかないか。シャルル、アリーナを出てから元気なかったけど……大丈夫かな。

「……さん」

「ん？ シャルル、起きてるのか……？」

ベットから上半身を起こして、隣にいるシャルルに声をかけた。こっちに向けた背中が震えている。両手で自分の体を抱きしめるようにして、身を縮めて、何かを呟いている。小柄な体が一層小さく、か弱く見えた。

「お母さん……」

「シャルル？ うなされてる、のか……？」

シャルルの口にした母さんという一言が、心臓を強く打ちつけた。スタンドの電気を点け、布団を蹴飛ばして、シャルルのベットに駆け寄る。放っては置けない。

「シャルル。大丈夫か？ 起きろ、シャルル。大丈夫だから……」

「う……ん、あれ……シン、どうして……？」

シャルルが向けた顔に光る、涙の跡。自分でも気付いたのか、慌ててゴシゴシとぬぐったけれど、跡は消えなかった。

「うなされてたみたいだったからさ……大丈夫か？ 今、水持つてくる」

「う、うん……」

水を入れる間にも、脳裏には悪夢がよみがえる。俺も見てきた、何度も何度も。

バラバラの家族の死体。飛び回るモビルスーツ。

雪の降るベルリン。目の前で吹き飛ぶステラの姿。

落ちていく青いモビルスーツ。とどろく雷鳴。  
夜中に跳ね起きるなんて、珍しくもなかった。

「ほら……落ち着くから」

「うん、ありがとう」

コップの水をこくこくと飲むシャルル。その視線は沈んだまま、  
布団をじっと見つめている。少しの間、沈黙が俺たちの間を包んだ。

「……なあ、シャルル。その、今日元気なかつたけど、何か悩みでもあるのか？ 俺で良かったら、相談に乗るけど……」

「ううん、ちょっと夢見が悪かつただけだから……気にしないで」

そう言つてシャルルは笑うと、コップを俺に渡してきた。前に見せた笑顔じゃない。いつも見せる笑顔でもない。明らかに無理をしている、作り笑い。

「お母さんつて、言つてた」

「……っ!？」

誰にでも、触れてほしくないことはある。頭で分かっているけど、聞かずにいられなかった。放っておきたくなかった。

「無理に聞くわけじゃないけど……何かあつたのか？」

「……………」

布団の端をぎゅつと握りしめて、シャルルはうつむいて黙つてしまった。また長い沈黙が続く。やっぱり、みだりに人に聞かれたくないことなのかもしれない。諦めて戻ろうかとも思つたその時、ポツリポツリとシャルルが語り出した。

「お母さん……僕をずっと、育ててくれてただけ……」

「父はいないようなものだったから、一人で、ずっと……」

「うん……」

「二年前に、亡くなって……それから、僕は一人で……」

そこで一度言葉が止まった。肩を震わせて、なんとか搾り出すような声で続ける。

「ここにいていいか、分からないんだ。僕は……」

「ここにいて……?」

「シンと違う。はっきりした意志があるわけじゃない。僕は……ここにいていいの?」

「シャルル……大丈夫だから」

「え……?」

震えるシャルルの手を握りしめる。自分の言葉でどこまで伝えられるだろうか。けど、伝えたいことがある。大切なことだ。

「俺もさ、ちょっと前まで研究所にいたんだ。そこでずっと、悩んだ。自分はここにいていいのか、自分がここで幸せでいいのか、ってさ」

「……」

「けど、そこで教えてもらったんだ。『誰だって、自分の大事な人には幸せでいてほしい』って。なあ、シャルルはここにいてどう思う?」

「……」

目を閉じただけで、短い間だけ多くのことが思い出せる。

初めて一夏に会った時のこと。  
セシリアと決闘した時のこと。  
篠ノ乃が俺を助けてくれた時のこと。  
凰に怒られた時のこと。  
シャルルが来た時のこと。

「俺はすつごく幸せだ。たまに騒がしすぎることもあるけど、一夏がいて、篠ノ乃がいて、セシリア、凰、それにシャルルがいて……みんなが、大事な人たちがいて、一緒に笑ってられるんだから。シャルルは、どうなんだ？俺たちと一緒に嫌か？」  
「そんなことないっ！みんながいて、それにシンがいてくれて……僕も、こんなに笑ってられることなんて、お母さんがいなくなっからなかった」  
「ならここにいていいんだ。それはシャルルが決めたことだろ？」  
「僕が、決めたこと……？」  
「うん。シャルルが自分で、自分の明日を選ぶってことだ。誰かにすぎるんじゃないくて、自分で決めた明日だから。お母さんだって、もちろん俺だって、シャルルには幸せでいてほしいって思ってる」

明日に目を向けること。  
ステラが教えてくれた。  
みんなが教えてくれた。  
ステラと約束した。  
みんなと約束した。  
だから、今の俺はここにいて、ここにいて、みんなと笑っていられる。

「もしシャルルの明日を奪おうとする奴がいても」

この世界で決めたこと。初めて『力』を手にした時に決めたことだ。

大切な全てを、大切な人の明日を守る。それを阻むなら

「俺がシャルルを守るから。どんなことがあっても、絶対に」

「……うん」

こくん、とシャルルが肯いた。体の震えも収まったみたいだから、落ち着いたんだろう。

その様子を見て、内心で胸をなでおろす。良かった。自信なかったけどなんとか伝わったみたいだ。

安心して時計に目をやると……現在時刻は夜中の二時過ぎだった。あーあ、夜更かししちゃったよ。明日が日曜日でホント助かったな……授業があつたら間違いなく居眠りして、出席簿に『ありがとう』ございます』ってお礼を言わなきゃいけないところだ。

「さて、それじゃ寝ると　シャルル、どうした？」

「うん、実はね」

ベットから離れようとした俺の手を、シャルルが掴んだまま放し  
てくれない。あれ、まだ何かあるの？

「眠れるまで、手……繋いでてくれないかな？」

「手？　うん、いいけど」

そのままバフツと布団に腰を下ろすと、シャルルはニコニコしながら布団をかぶった。

マユにもよくねだられたなあ、コレ。男同士のはずなのに、シャ

ルルが相手だと全然気にならないのが不思議ではある。多分ヴィーノの抱きつきと同じだ、柔和で人懐っこいシャルルの人柄のなせる業なんだろう。俺と一夏でやったら……怖いから、やっぱり考えるのはよしとこう、うん。

「ねえ、シン。聞いていいかな？」

「良いけど……聞いたらず早く寝るよ？ このままだと俺、眠れないよ」

「じゃあ、一緒に寝る？」

「冗談は止めて早く寝かせてくれって。ほら、何だ？」

「ふふっ、つれないなあ……ねえ、シンの家族は？」

「……みんな、もういないんだ」

「あっ……ゴメン」

「いや、いいんだ。俺はもう、大丈夫だから」

ほんのちよつとだけ、シャルルの手の力が強くなった。それに返すように、手を握り返す。

「お休み、シャルル」

「うん……おやすみ、シン」

手を繋いだまま、シャルルは目を閉じた。傍で座ったままぼんやりとしているうちに、寝息が聞こえてくる。そつと手を放して、眠っているシャルルにもう一度。

「お休み、シャルル。また明日」

そう言って自分のベットに戻って、布団をかぶる。頭の中ではまだごちゃごちゃと考え事があるはずなのに、今度は眠気はすぐに襲ってきた。また、明日か。ああ、訓練の手伝い頼むの忘れ

その日、夢を見た。ミネルバの 船のみんなが出てくる夢だ。夢の中だけど、久しぶりにみんなに会えて嬉しい……嬉しいはずだったんだけど、何かがおかしい。

みんな、俺のことを叱りつけるんだ。レイモルナもメイリンも、ヴィーノもヨウランも、アーサーに艦長まで……みんながみんな（特に女性陣）

『自分が今日何を言ったのか、お前本当に分かってるのかっ!?!』

って。何か怒られるようなこと言っただけ？

ああ、夢の中にはアスランも出てきて、俺のことをかばってくれた。みんなの怒りが収まるどころか、余計に怒り出したけど。

『シンが何を言ったんだ？ みんなで責めるようなことは言っていないだろう？』

『このっ……馬鹿野郎っ!』

それで、俺はアスランと二人で、目が覚めるまでずっとお説教を受けていた。

なあ、アスラン。俺たちの何がいけなかったんだ？ 俺たちが何をしたっていうんだ？ なんでみんなため息ついてるんだ？ え、ア  
ンタも分かんない？ 俺も分かんないよ……

第七話『君がくれる明日』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてダークネスと一  
つになってしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1524v/>

---

IS インフィニット・ストラトス シン・アスカの激闘

2011年10月28日06時06分発行